
貪食IS-Gaping IS-

水深無限風呂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貪食IS－Gaping IS－

【Nコード】

N4709Y

【作者名】

水深無限風呂

【あらすじ】

おぞま

悍しい姿の異形となった朽ちぬ古龍の子孫『貪食ドラゴン』。

数々の不死者を食らい尽くし、貪り尽くしてきた存在。

そんな貪欲の塊とも呼べる存在が、ある一人の騎士を殺し、人間性を得たところ。

実に奇怪な文章を白い光に見ることとなる。

その奇怪な文章とは——『人間となり、別の世界へと侵入します』

——というもの。

そして次に貪食ドラゴンが目を覚ました時には既に以前の悍しい姿

はどこにもなく、貪食ドラゴンの姿は可愛らしい少女のものとなっていた――。

――この話は、匠も腰を抜かす劇的ビフォー&アフターを終えた貪食ドラゴンと、そんな彼女を親切心からつい拾ってしまった厨二病の抜けきらない平社員とか、未だ厨二病の抜けきらない変態企業の社長とかの物語――。

※ダークソウル界のアイドルこと『貪食ドラゴン』がISの世界に転生する話。ゆるほわ貪食系を目指して頑張ります。

※厨二病の抜けきらない平社員は特に出番多くありません。原作でいう五反田弾程度です。

※変態企業の父親はそんなに出番多くありません。原作でいうクラリッサ程度です。

プロローグ 最後の生贄（前書き）

今回は何かプロローグなんで殺伐としてますが、基本的にゆるほわ貪食系で行くつもりです。

ゆるほわ貪食系がどんなのかは知りませんが。
まあ。

何がともあれ、ハイスピード学園貪食系ラブコメディ、開幕です！

プロローグ 最後の生贄

血とヘドロと汚物、更には忌々しい呪いの息が充満する『最下層』。

全ての不要物の辿り付く場所であり、全ての迫害者がその一部となり、肥大し続ける世界の死体。

全ての生を受けし者が名前を呼ぶことすら拒み、行く事となれば自害を選ぶほどに拒否され続ける場所。

そこに向かうは偽りの使命に駆られた迫害者——生持たずして人の形を模る『不死者』——のみ。

不死者は幾度と死のうとも呪いにより蘇り、永遠の苦痛を味わい続ける。

そして、その末には思考することを放棄し、本能がままに動き続ける機械人形——亡者と化す。

亡者となれば、世界の終るその日まで永遠に何も考えず、何も感じず、死んでも、殺されても、分解されたとして生き返り続ける。

愚かな不死者共は亡者となる前に与えられた『使命』を果たそうとする。

使命を果たすには二つの前準備が必要である。

一つは、朽ちた不死者共の教会に取り付けられた鐘を鳴らすこと。

そして二つは、世界中の不要物を溜め込んだ最下層の更に深層。

疫病と猛毒ばかりが充満する瘴気に満たされた汚染所、病み村の最奥に存在する鐘を鳴らすこと。

数々の不死者はその試練に挑み、多くは教会の鐘を守り続けるガールゴイルの手によって消し炭と化すが、ごく稀に一部。上の鐘を鳴らし、下の鐘を鳴らさんとする者が現れる。

——だが、未だに下の鐘が鳴り響いたことは一度もない。

それ以前に、ある日を境に病み村に辿り付く人間はぱったりと居なくなった。

何故か。

理由は至極単純である。

病み村への門を開く鍵を飲み込んだ『貪食ドラゴン』の存在である。

貪食ドラゴン——ウロコのない白竜『シース』の裏切りにより世界各地に散らばった朽ちぬ古竜の子孫。

だが、その姿は多くの神話で語られるような恐ろしくも神々しいその姿とは懸け離れている。

理由は単純明快。住み着く場所が『最下層』だったからだ。

食物と呼べるような物など一切なく、腐肉と汚物を貪り尽くすしかない。その汚らわしい世界に神々しい古竜の体は徐々に蝕まれ。結果。

その姿は胸から腹に掛けて大きく裂け、そこに大きさの揃わぬ不出来な歯を無尽蔵に並べた大口を持ち、更には竜の出来そこないである『蛇』にも似た体を持ち、六本の足従^{おぞま}わせ、背中には劣化の始まっている四枚の翼を持った、非常に悍^{おぞま}しい異形へと変貌した。

更には『不動』と呼ぶにまさに相応しい性格は失われ、ありとあらゆる物をいじましく貪り尽くす誇りなき性格へと豹変している。

言うならば、亡者と化した古竜。

そんな存在が病み村の鍵を飲み込み、以後流れ的に守護し続けている。

体は瘴気に蝕まれ、全てを焼き尽くす熱の吐息は失われたとはいえ、その強靱な肉体と巨大な体は全てを圧倒し、何人たりとも寄せ付けない。

更に最悪なのはその習性だ。

目に付いた物は何であろうと、貪り付くし、噛み砕き、飲み込む。普通の人間ならば即死で終わりだろう。

だが、不死者はこの貪食ドラゴンに挑み続ける限り、何度でも噛み砕かれ、飲み込まれる体験をしなければならない。

それは体は朽ちぬとは言えど、心は死ぬ不死者にとって最大最悪

最強の武器である。

そんな最強にして、最悪であり、劣悪である貪食ドラゴンへと、今日も一人愚かな不死者が挑む。

その名は『受け流しヴァレンティーン』。不死者となる以前は百戦錬磨の騎士であった。

彼はその異名通りに敵の攻撃を左手に持つ『バネ仕込みの盾』を使って見事に受け流し、がら空きの体に右手に持つ『貫きの剣』による致命の一撃を放ち、全ての敵を一撃で葬り去ってきた強者である。

その腕は不死者になってからも朽ちることはなく、亡者共の攻撃は当然。鐘を守護するガーゴイルの攻撃すらをも受け流し、一撃で仕留めて来た。

——今日も抜かりはない。

誰しもが一度も勝利したことのないと言われる貪食ドラゴンへと挑む寸前になっても、ヴァレンティーンには不安などは一切存在しない。

存在するのは圧倒的自信と、途切れることのない集中力、そして溢れんばかりの力であった。

そんな彼は貪食ドラゴンが待つ大広間への入り口を塞いでいる白光に触れようとして、壁に橙の助言ろう石——不死者同士がその先の情報を壁や地面に書きこみ、お互いを助け合い、また騙しあう道具だ——で書かれた文字を見て、思わず苦笑した。

その文字とは。

『この先かわいい奴あり』。

——脳みそまでカビたか。それでよく生きられたものだ。

そこまで思い、ふと、再び苦笑する。

——すでに生きてはない、か。

自分の置かれた状況を再確認したヴァレンティーンは緩んだ集中力を引き締めなおし、ゆっくりと白い光の中へと入り込んでいく。目の前に広がった光景に、思わずヴァレンティーンはもう一度気を緩めてしまう。

壁には大きなヒビが入り、そこから求め続けた太陽の光が差し込み、床に広がる汚水を照らし、乱雑な彩色を浮かび上がらせ。数々の戦闘で崩れた柱が不規則に影を生み出し、その影は一つの芸術品のようにさえ見えた。

なんとも退廃的で、なんとも神秘的だ。

思わず「ほう」と息を吐いたヴァレンティーンだったが、直後、再び気を引き締めなおす。

大広間の最奥。崖となって汚水を下に吐き出し続ける穴場から巨大な蛇の頭のようなものが此方を覗いていたからだ。

その頭はヴァレンティーンを見つけると、左右に振っていた首を止め、ヴァレンティーンを強酸性の液体のような毒々しい黄金の瞳でじいっと睨み続ける。

無機質で死に続けるような瞳に睨まれても、ヴァレンティーンは微動だにせず、ゆっくりと戦闘体勢へと移る。

——グオオオウオオオ……。

猫が喉を鳴らす音にも似た醜悪な音を鳴らしつつ、貪食ドラゴンは人の手にも似た不気味な六本足を器用に動かし、深淵の底から這いずり出てくる。

——グオオオオガアアアアアアア！

まるで悲鳴のような雄叫びと共に貪食ドラゴンは這いずり出、その巨大な全身をヴァレンティーンに惜しむことなく晒すと。

——ガアアアアアアア！

大きく体を仰け反らせ。

その名前の由来ともなった。

貪食者の象徴である大口を。

貪食竜の大口を惜しみなく開いた。

数多に並ぶ牙、舌等一切なく、噛み砕くことしか考えておらず、直接気管支へと繋がっている大口。

ヴァレンティーンは右手の貫きの剣と、左手のバネ仕込みの盾を強く握りなおし、駆ける。

——ヴァレンティーンの武具は確かに特殊なものだが、鎧自体は上級の騎士なら誰でも所持しているであろう一般的な防具だ。

神の加護や特殊な力も込められておらず、あの巨体——あの大口での攻撃を食らえば即死は免れないであろう。

だが、ヴァレンティーンは雷光の如く掛け、僅かな時間で貪食ドラゴンとの距離を詰める。

狙うはその大足。

コレほどの巨体を支えている足だ、多少のダメージを与えれば、後は自己負荷でダメージは幾らでも蓄積されるだろう。

それがヴァレンティーンの考えであった。

右手の貫きの剣で雷撃のような突きを貪食ドラゴンの支える足の一つに食らわせる。

——が。

刃は通らない。

——何？

現状をヴァレンティーンが飲み込む前に、貪食ドラゴンはヴァレンティーンへと倒れ掛かってくる。

当然、避け切れず、その巨体の下敷きとなる。

直後にヴァレンティーンの全身を襲う激痛。

数箇所には鋭くも鈍い歯が複雑に突き刺さっている。

そこまできて、ヴァレンティーンはようやく理解した。

貪食ドラゴンが不敗たる所以を。

その異形の姿にばかり気を取られて、誰もが知らなかった理由。だが、それはよくよく考えれば実に簡単に推理できることでもある。

——古竜のウロコは、岩よりも硬く、また、傷つかず、古竜が朽ちるのを阻害しているものだ。

そして、この貪食ドラゴンもその古竜の子孫であり、多少は劣化しているだろうが、そのウロコは非常に堅甲だろう。

……更に言えば、弱点となりえる足には当然その絶対数も多い。ならば、ヴァレンティーンの攻撃が通らないのは至極当然の出来事であろう。

——何を馬鹿なことをやっているんだ、私は……。

ヴァレンティーンが自分の過ちに気付いたと同時に、貪食ドラゴンは再び悲鳴にも似た空気を振るわせる雄叫びを上げた後。

倒した体をそのままに、地面を這いずり始めた。

ヴァレンティーンは貪食ドラゴンの巨体と、凹凸の激しい地面に挟まれ、すり潰されて行く。

それは非常に、そして異常な痛みをヴァレンティーンへと刻み付ける。

——だが、ヴァレンティーンは最後の足掻きをする。

——ウロコで刃が通らないなら——。

感覚などなく、痛みだけを無造作に伝えてくる右手に力を入れ。

——ウロコのない口腔内を狙えばいい——。

強く握った貫きの剣を、勢いよく目の前に広がる血のようにどす黒い赤色をした肉に突き刺す。

剣は容易く根元まで沈んで行き、ヴァレンティーンを飲み込まんとばかりに大量の赤を噴出す。

普通の生物なら明らかに致命傷であろう。

そして、ヴァレンティーンは苦笑する。

——こんなバケモノ相手でも、致命の一撃で倒せるとは。つくづく私は運がいい。

内心で苦笑しつつ、ある事に気付いた。

……貪食ドラゴンの動きが一向に止まらない。

まるで、ダメージを受けていないかのように。

そう、確かに普通の生物なら致命傷だろう。

——だが、朽ちぬ古竜に急所は存在しない。

たとえ、剣の一本が突き刺さろうと突き刺さらんと、なんら変わりはない。

その事に気付いたヴァレンティーンは思わず焦りを覚えた。

ここまで身を挺した一撃を食らっても怯みもしないことに。

本当に倒せるのか？

そう思った瞬間に、ヴァレンティーンの下半身に一際大きな牙が突き刺さり、遂に千切れる。

声にならない叫びをヴァレンティーンは上げるが、誰も聞くものは居ない。

次に右手、次に左手、次に首下。

普通の人間なら即死のダメージだが、不死者であるヴァレンティーンは頭が無事な限り生き続ける。

どのような苦痛を浴び続けても、永遠に。

だが、その永遠は長くは続かず、ヴァレンティーンの頭は起き上がった貪食ドラゴンの足によって熟れ過ぎた果実のように容易く踏み潰された。

瞬く間の静寂。その静寂は貪食ドラゴンの勝利を示していた。

そして、踏み潰されたレヴァンティーンの頭から黒い精が現れ、貪食ドラゴンへと吸い込まれていく。

それはレヴァンティーンが数々の亡者共から抜き取ってきた『人間性』。

生命の全てである『ソウル』とは別に人間にのみ存在するモノ。

その人間性が貪食ドラゴンの体に入り込んだ瞬間。

貪食ドラゴンの体に異変が訪れる。

巨大な体中に幾何学的な紋章が走り、肉体に刻まれ、赤く燃える。だが、不思議と貪食ドラゴンは痛みは感じず、ゆっくりと眠りに着く様にうずくまる。

そして、貪食ドラゴンの体はゆっくりと透けていき、そのうちに以前飲み込んだ病み村への鍵がコトリ、と地面に落ちる。

それは、肉体の消失を意味していた。

次には貪食ドラゴンの視界がだんだんとぼやけ、白い光に包まれていく。

そんな光の中に貪食ドラゴンが見た物は、人間性とよく似た黒い文字で書かれる――。

『――人間となり、別の世界へと侵入します――』

――実に奇怪な文章だった。

プロローグ 最後の生贄（後書き）

※受け流しヴァレンティーンの出番は終了。お疲れ様でした。

01 親方、裏庭に女の子が（前書き）

主人公が如き脇役の登場。そして厨二病の旋律。

01 親方、裏庭に女の子が

「……帰ったぞ」

玄関のドアを開けつつ、男が声を発する。

だが、家の中は人が居るところか明かりすら点いていない。

理由は単純明快。

この男が一人暮らしだからだ。

一応それなりの大きさの一軒家に住んではいるが、同居人は誰もいない。

一人で暮らすには実に広すぎる家だった。

だが、アパートやマンションなどは彼の性に合わなく住み心地が悪い。
悪い。

だからこの孤独にも耐えるしかない。

そう再び思いつつも、男——朔咲さくさき尚紀なおきは明かりを点け、身に付けていたスーツを乱雑に脱ぎ捨て、ソファへと深く腰を沈める。

(……ニュースでも見るか)

尚紀は何気なくテレビの電源を入れ、適当にチャンネルを回してニュースを映す。

『——グリッグス大統領は自分の容疑を否認し、それに対してペトルス評議員は——』

移った画面には幸薄そうな大統領と、キノコ頭のブロンドの悪人顔の男が何やら口論している場面が映る。

それだけなら軽いコメディにも見えるが、どうやらニュースの内容は政治関連のモノらしい。

そしてそれは、尚紀の最も得意とするニュースであった。

ニュースを目にした途端。尚紀は落胆したかのような表情を浮かべ、ゆっくりとポケットから携帯電話を取り出す。

そして、電源の入っていないソレをゆっくりと耳に当て――。

「……俺だ、どうやらグリッグスがまたミスをしたらしいな。本当にアイツはアテになるのか……？ 何？ フツ、まあいい……お前がそう言うんだから間違いはないのだろう。ああ、任せろ。……では、また連絡する。いつもの合言葉か？ 忘れるはずがないだろう？ ……炎の導きを……アンバサ」

もう一度説明しよう。

尚紀は一人暮らしであり、同居人もおらず、実は後ろに友人が……ということもない。

では、この行動は何なのか？ と言われれば答えは一つしかない。
“特に意味はない”

満足げな表情をしつつ、尚紀は耳に当てていた携帯電話をポケットへと再び捻じ込む。

そしてそのまま、訪れる虚無感に身を任せていたところ――。

「……？」

ぼとり、と庭の方で何かが落ちてきたような音が聞こえた。

「なんだ……？」

小鳥程度が落ちた音の大きさではない。

少なくとも40～30kg程度の重さのモノが落ちた音だ。

……一体何が？

得たいの知れない恐怖、そして怖いもの見たさ。二つの相反する

感情に尚紀は揺らぐ。

——見に行くべきか。行かないべきか。

じつくりと悩み、そして、父親がよく口にしていた『虎穴に入らずんば虎子を得ず』という言葉を思い出し、決心する。

尚紀は立ち上がり、音の発信源である裏庭へと懐中電灯を持ってゆつくりと進む。

（もしも、この世のモノとは思えない超不気味な怪物が居たらどうしよう……いや、馬鹿。そんなのありえるわけないだろ。きつと鷹とか鳶とかが雷に撃たれて落っこちてきたただけだ。うん、そうに違いない）

どちらもどちらとて在り得ないシチュエーションだと思えるが、ある意味どちらも有り得る。

何せ、この世に在り得ないことなど存在しないのだから。

だが、尚紀は父親の『虎穴に入らずんば虎子を得ず』という言葉を再び思い出し、勇気を持って裏庭へと続くドアを開け放つ。

そして、懐中電灯を忙しく当たりて照らして『落ちたモノ』を探す。

その手は明らかに震えており、また、その行動から焦りと恐怖心も伺える。

なんとも弱い男である。

そんな尚紀が大きくライトを振った一瞬。

草むらの影。一部だけ不自然に黒い部分を尚紀は見つける。

おかしいと思い、再び尚紀はライトを向ける。

そうすれば黒い部分は穴などが開いているワケではなく、光を反射してカラスの羽のような紫色を所々見せる黒色の何かだと尚紀は気付く。

恐らくは、これこそが先ほどの音の原因なのだろう。

その色から尚紀はカラスか何かかと判断し、ゆつくりと近づいて

いく。

ある程度正体が見えたからか、尚紀は先ほどの恐怖を振り払ったかごとく、堂々とした足取りで進んでいく。

そして、尚紀が『ソレ』に手が届く程に近づいた時。

「なっ……あっ……!？」

ようやく尚紀は『ソレ』の正体を把握する。

カラスのような光の反射によって所々紫色に光る黒髪の『少女』だ。

回りの暗さ故に顔しか見えないが、その肌は美白を通り越して病的な程白く、血色も余りよくない。

それを見て、尚紀は不謹慎ながらも以前見た『世界一美しい死体』を思い出してしまう。

(……生きてるよな？　生きてるはずだ、生きてないなんて許さない……いや、許さなくてどうする！　生死はどちらでもいいから取りあえず家に運び込むしかない！　死体が庭にあったなんてことが公になれば俺は——ッ！)

自然に発見されるまで放っておき、発見されても『知らない』の一点通しでなんとかかなりそうなものだが、パニック状態となった尚紀はそんな事は考えず、目の前でぐったりと倒れる少女を担ぎ上げ、小走りで家の中へと掛け戻る。

裏庭、玄関の鍵を何度も確認し、完全な密室を作った事を確認して、ようやく尚紀は肩に担いだ少女をソファへと下ろす。

……そして、下ろして気付いた。少女が一糸纏わぬ姿であることに。

思わず尚紀は一瞬、考えることを止める。

「……おい、どういう事だよ……なんなんだよこれッ!!」

そういうことである。

ガンツとテーブルを右手で思いっきり殴った尚紀だったが、そんな天の声が聞こえたような気がして、気を落ち着ける。

そして、テーブルを強く殴ったために痛む右手をさする。

「……………」

死んだかのように眠る少女は、これだけの音が鳴っても動じない。

……本当に死んでるんじゃないだろうな？

そんな考えが一度だけ過ぎるが、それを尚紀は頭を振るようにして振り払い、もう一度目の前の少女をじっくりと観察する。

……精巧な人形のように『過ぎる』ほど整っている顔。

……雪のように白く、血すら通っていないかのような肌。

……皆無と言ってもおかしくない胸の厚み。

……抱き締めやすそうな、いや、もはや抱き締めることを前提に作られたかのような体つき。

……躍動感溢れる少女の手足とはまた違った、背徳感と加虐心を掻き立てる弱弱しい手足。

「……………」

その目の前に存在する『人形のような』少女を見て、尚紀は黒い思考を思わず浮かべる。

「……ッ!」

尚紀は思わず自分の最低な思考に反吐が出そうになるが、何とか堪え、最寄の壁による。

そして手を壁に付けて一度深呼吸し――。

「俺はロリコンじゃないッ！ 親父とは違うッ！」

この二つの言葉を延々と吐きながら壁へとドンドンと頭を叩きつける。

――一軒家暮らしでよかった！

つくづくそう思う尚紀である。

八度ほどこれを繰り返したところ、ようやく尚紀の思考は落ち着き、『衣類が無ければ買えばいいじゃない』というどこかの悪女のようなことを思い浮かべる。

思い浮かべたら後の行動は実に素早く、財布を片手に外へと飛び出す。

そして買って以来使った回数が二桁に達していないマウンテンバイクドラグーン・メテオストーム（音速の流星群）にまたがり、最寄の服屋を目指して全速力でペダルを漕ぐ。

大体十分ほど漕いだだろうか。

遅い時間で幸い走っている車も少なく、体力を余らせた中学生のような乱暴な運転でも事故一つ起こさずに尚紀は“走行中に両足が攣る”という日頃の運動不足から来たアクシデント以外は何事も無く無事に服屋へと辿り着いた。

「ハァー、ハァー……」

荒い息を吐きながら、服屋の前で尚紀は肩を上下させつつ、ポケットから電源の入っていない携帯電話を取り出す。

「俺だ、今、敵の要塞……ああ『不可視の要塞』に到達した……、

今より『沈黙の追跡者』サイレント・ナイトストーリーカー 作戦を開始する。ああ、任せろ……ミスもぬかりも一つもない。……では、また連絡する。炎の導きを……ア

ンバサ」

一人芝居でいくらか落ち着いた尚紀はポケットに携帯を捻じ込み、服屋へと入る。

そして真っ先に向かうは女性下着コーナー。

見事な直角カーブで最短距離を進み、まるで予めコースを予定していたかのような動きで女性下着コーナーへと尚紀は食い込む。

もちろん、その途中でカゴを手取るのも忘れない。

そして次に行うのは目に付き、そしてあの少女のサイズと合うであろう下着を無造作に二枚ずつ取っては買い物カゴへとぶち込む。

そんな作業を約二分ほど続け、合わせて約三十六枚ほど適当にぶち込んだあと、再び見事な直角カーブと斜線移動によりカウンターへと進む（ちなみに尚紀の独断で上側の下着はぶち込まれていない）。

「あ、あの。お客様……？　こ、此方の商品は……」

無表情でそんなことをやってのけた尚紀へと、実は入店時から様子がおかしいと思ってずっと見ていたカウンターの向こう側の店員は若干引き気味で何かを言おうとするが、尚紀の表情を見てどもつてしまう。

しかし、まあ。

店員がおかしく思うのも当然であり、必然である。

幼児用のものを買うならまだしも、今回尚紀が買いものカゴにぶち込んでいる下着類のサイズは明らかに思春期真っ盛りの少女達用のサイズ。

思春期真っ盛りの少女、ということとはつまり、自分で下着を選ぶのが当然の年頃であり、尚紀のような父……あるいは兄当たりに該当しそうな人間が買う商品ではない。

よって、考えられる用途は非常に変態チックなものだろう。

「これが欲しいんです」

だが、そんな女性店員の視線にも尚紀は怯まず、トーンの変化がない一直線の声で言う。

「で、ですが……お客様……？」

「これが、欲しいんです」

「お、おきや」

「欲しいんです」

「ご、合計で34920円になります」

最終的には尚紀の気迫に押された女性店員はようやく引き下がる。尚紀は内心勝利の味をかみ締めつつ、財布の中から尚紀は五万円札を取り出し、カウンターへと静かに置く。

そして沈黙を決める尚紀。……ちなみにカウンターの店員はちよくちよくチラチラと尚紀の顔色を伺っていた。

しばらくの沈黙が過ぎ、会計が終了し、店員が大きな目のビニール袋に下着類を全て入れ終わり、尚紀に渡した瞬間。尚紀は再び、どこぞの頭文字が四番目のアルファベットになっている漫画も青ざめるドリフトテクを多用して服屋から飛び出す。

「……………」

飛び出た尚紀はゆっくりとポケットから携帯を取り出す。

そして、耳へと当て――。

「ああ、俺だ。作戦は無事成功した……。……ああ、惜しいヤツを無くしたがな。『偉大なる一枚』……ヤツは素晴らしい戦士だった……三十六体の『垣間見える魅力』を洗脳し、砕け散ったよ……、

ああ、ああ……何時までも落ち込んではいられない、か……。安心しろ。俺を誰だと思っている？ ……ふっ、そうだ、俺は俺だよ。ではな、また連絡する……。炎の導きを……。アンバサ」

——お決まりの一人芝居をした。

それを終えると、ポケットへと携帯電話を突っ込み、再びマウンテンバイクへとまたがる。

そして、先ほどの足が攣った際のダメージもあるために今度はゆっくりと漕ぐ。

結果、家に着くまでに約三十分掛かったのは言うまでもない。

01 親方、裏庭に女の子が（後書き）

……あれ、今回もゆるほわ貪食系になってないぞ……？
ゆるほわ貪食系がどんなのかは知りませんが。

02 一片道切符（前書き）

本来作成してた二話が不慮の事故で消え去ったから急遽書き上げた
……これはそんな話です。

02 一片道切符

私は一度も腹が満たされたことがない。

ゴミを食っても、ヘドロを食っても、岩を食っても、生者を食っても、死者を食っても、不死者を食っても、何を食っても。

『満足』というモノを味わったことがない。

私は気付いた時には薄暗く薄汚く瘴気に満ちて正気を失う世界に閉じ込められていた。

何もすることもなく、何をできるわけもなく。

永遠とも呼べる空白の時間。

ついには痺れを切らして、辺りの物を口にしてみた。

もともと食物ではなかったのだろうけど、あまりの不味さに吐いた。

でも、しばらくしてみて再び口にしたくなった。

今度は吐かなかった、でも、代わりに『餓え』が襲ってきた。

餓えて餓えて餓えて餓えて餓えて餓えて。

いくら食ってもいくら食ってもいくら食っても。

一切満足しない、できない。

貪って貪って貪って――。

瘴気に飲み込まれて、蝕まれて、水面に映る私の姿は日に日に悍おぞましい物へと豹変していった。

小人共は見た目を重視するらしいが、古竜の子孫である私には関係のないことだ。

そう思って毎日毎日貪る。

そんな生活を続けていたところ、ある日を境に私の元へ小人共が現れるようになった。

命知らずの馬鹿共か、それとも自信家が身を滅ぼしに来たか。どちらにせよ自殺願望者に違いはない。

食って食われるこの世。死にたがりの能無し共は食ってやろう。

私は即座にそう判断し、ここ最近で最も悍しくなった胸部から腹部にかけての大口で食らってやった。

味も何もわからないが、食い千切る感触と、抵抗する相手を蹂躪し、己の糧とする『狩り』に似た感覚が実に私を楽しませた。

そして最も幸いだったのが、その小人共は何度殺しても蘇ることだった。

その場で、とはいかなかったが、一度食った奴でもその後しばらくすれば再び私の前に顔を出した。

何がしたかったのかは全くもって分からなかったが、私としては非常にありがたいことだった。

小人が来ては食らい、小人が逃げては食らい、小人を見つけては食らい。

そんな生活を一週間も続けた頃には小人共が主食になった。

時には三十人程度という大勢で現れる奴らもいたが、何ら問題なく食らった。

そして、そいつらを食らって分かったことが一つだけあった。

小人共を食らうと、たまに黒い精が姿を現すことがある―――たしか、小人共は人間性とか呼んでいたか。

それを食らえば、私にしては珍しく多少満たされたような感覚を覚えた。

『これが、満たされるといふことか』と思うと同時に『また知らないことを覚えた』とも思った。

実質的には後者の考えが非常に正しかった。

それから毎日『人間性』を求めては殺戮を繰り返す日々。

だが、一向に小人共は人間性を落とさず、苛立ちも募るばかり。

そんなことを繰り返している内に、人間性は強者や聖者……伝説上の人物などに多いということがわかった。

元々は小人共の伝説になど興味のなかった私だが、動かぬ古竜たちが互いの情報を交換し合うために使っている、特定周波数の魔術を拾い（私が瘴気に蝕まれたせいかどうかは知らないが、断片的にしか拾えなかったが）、小人共の情報を集めた。

結果として、どうやら小人共は私が数日前に飲み込んだ鍵や、私の尾に眠っている武器（もっともそんな物を眠らせている気など毛頭ないのだが）などを狙っているらしいことが分かった。

だが、そんなことがわかって私には無駄だった。

何せ、私は忘れるような過去に辿り着いたこの大広間から外に出られないのだから。

苛立ち。

苛立ちばかりが募る。

人間性は全く得られず、最近では殺した小人共を食らうこともやめ始めている。

食らうのも腹立たしい。

そう、思っていた日々――。

その日々は、いつ終わったのだろうか。

意外と早かったかもしれないし、遅かったかもしれない。

よく、覚えてはいないが。

半分以上忘れかけているが。

あの、騎士を殺した瞬間に――。



「……んう……？」

ゆっくりと瞼を開ける。

それと同時に途方もない疲労感と空腹感。

苛立ちは――それほどない。

だが、それに代わって『驚愕』があった。

天井が、白い。

菌糸が蔓延り、ヘドロがこびり付き、死肉が垂れる見慣れた天井じゃない――。

いや、それ以前に『眠る』こと自体が久しぶりだった。

天井が白い――。

しかも、それだけじゃない。

地面が、柔らく、暖かい。

更には軽く、それでいて暖かい何かが私に覆いかぶさっているようだった。

驚愕の連続。

あまりにも驚く点がありすぎて、どれから反応したらいいのかわからない。

「やつと目覚めたか……『眠れる白姫』よ……」
グッナイ・ホワイトプリンセス

そんな驚愕の連続に襲われる中、横から聞きなれた小人の声が聞こえた。

また私に食われに来たか――？

そう思って横を見れば。

――小人じゃなくて大人だった。

でかい。

私のサイズから考えれば相当な大きさだ。

私がすっぽりと収まるサイズが大聖堂一個分程度なので、私を遙か上から見下ろしているコイツは小人共からすれば顔が伺えないほど巨大であろう。

あまりのサイズに今までに一度も感じたことのなかった『恐怖感』というものを感じた。

そうすれば、自然と後ろに下がって――。

「あ、バカ、そっちは――」

直後。

視点が大きく上を向くのと同時に、後ろへと引っ張られる。

「んひゃあっ!？」

瞬く間の浮遊感。

そして、背中に衝撃。

痛みは感じないが、何が起こったか未だに整理がつかない。

……そんな私へと、世界は無情にも追撃を掛けた。

半透明の壁に移る姿——おそらく私の姿——。

それは、以前に食らい食らった小人共のモノとなっていた。

——あ、なるほど。アイツが大きいわけじゃなくて私が小さくなったのか。

……て、納得できるかつ!？

「は……? あえ? え? は? あ?」

とりあえず体の向きを正常に戻し、立ち上がろうとする。

が、上手く立てず、半透明の壁に体を押し付ける形で立ち上がった。

……そうだ、小人共は足が二本なんだった。

なんて抜けたことを考えつつ、半透明のカベに映りこんだ自分の姿をマジマジと見る。

足はかなり細く、元の私が触れたら簡単に折れそうなほど。肌の色は非常に白い。脂肪ぐらいいは白いんじゃないだろうか。

腰周りも細く、何とも栄養が足りていない感じた。……小人共の基本的な体系がどうか知らないが。

それと、何故か腰にのみ衣類が着けられている。青と白の縞々模様の逆三角形の物体。……なんだこれは、護符か何か。まあいい。

おそらく何の力も感じないあたり何もないのだろう。

次に腹部……らしいところを見て、そのまま胸部……？　へと視線を移す。

見事でない。

私の象徴であり、誇りでもあった大口が。

数々の英雄気取りの能無し共を胃の中へと送った牙が。

……なぜだ……なぜだ？

腹部は押してみれば中々の弾力。

胸部はなぜ存在するのか分からない小さい膨らみと、その頂点に新鮮な肉のような色合いの突起。

で、そこから更に上に上って……顔。

私の唯一の汚点であった『竜の出来損ない』である『蛇』に似ていた顔——。

——うん、普通に小人共の顔だこれ。

ただ、よく整ってはいると思う。小人共の顔をいちいち見ていたワケではないが。

そしてかつての私のウロコのように光の反射によって鈍い紫に輝く黒髪。強酸性の液体のような毒々しい黄色の瞳——。

これが、私の全貌だった。

「はぁ……！？　ハアアアアアアアアアア！？」

あ、それと声も小人と同類のモノになっていた。当然か。
むしろここまで来て声のみが元と同じだったらおかしい。

「ど、どうした？　何かあったか？」

余りにも突然に私を襲った激変に、私が散々に混乱していると後ろの小人が私へと話しかけてきた。

……そうか、この男だ。この男に違いない！　こいつが私の姿を

変えた、そうだ。そうと考えれば納得が行く！
勢いよく後ろを振り向き、男の顔を指差す。

「お、オマエだなッ!? 私をこんな姿にしたのは! 呪術師か?
しかし、貴様。私をこんな姿にして……何を考えている? 陵辱
でもする気か? ハッ、やはり能無しの小人共は考えることは分か
らん! いいか、とりあえずだ! 私を元の姿に戻せ! 今すぐに
だ!」

私の完璧かつ完全な推理が命中したことに呪術師は大変驚いたよ
うで、目を丸くしてこちらを見ている。

……まさか本気で陵辱するつもりだったとは……。
私が男になったらどうするつもりだったんだ、こいつは?

「クッ……、クククッ……中々の推理だ……。だが、違う。俺は貴
様を擬人化させた挙句に陵辱しようなどと一切考えていない。……
俺は貴様から力を借りようとしたただだ、そう『一貪食なる古龍の
子孫（ゲイピング・アトモスフィア・オールドラコーン）』であ
る貴様と契約することによってなあ……」

気味の悪い笑い声と共に男はそんなことを言うてくる。

契約……? 契約だって?

まさか、そんな馬鹿な。

確かに、小人共には時折古竜に祈りを捧げ、古竜の特権である『
朽ちない体』を得て、生命の超越を目標とする奴らもいる……とは
聞いたけど。

まさか。

私と契約しようとなんて……。

別にできないワケじゃない。私だって一応瘴気に蝕まれてるとは
いえ古竜だ。

だが……。

「……貴公、どうなるか分からんぞ？」

そう、どうなるか分からない。

基本的に『契約』というのは契約者へと近づく為のモノ……だと聞いた気がする。

何処かに隠れている『暗月の神』なら、暗月の神の象徴である『復讐』をひたすらに繰り返すようになるし。

何処かに閉じ込められている『ダークレイス』なら、手当たり次第に他人の世界に侵入して殺戮を尽くすし。

何処かに眠り続ける『最初の死者』なら、周囲の世界に災厄をばら撒くし。

……まあ、他にも人間同士とか化け猫だとか、衰弱したデーモンだとか神の幻だとかと契約する奴もいるみたいだけど……そんなのは知らない。あんなのは所詮『ごっこ遊び』だ。

で、話を元に戻すが。

私と契約する。

……どうなるんだ？

やはりあれだろうか、他の古竜と同じような感じになるのだろうか。

それとも『貪り続ける者』とか呼ばれるようになるのか？

……それ以前に私は何を求めればいいんだ？

追記すれば、契約した相手には予め一品の『献上物』を決めておき、それを一定数献上した契約者には力を貸す……というルールもある。

私が欲しい物……、うん。人間性だな。あれを食うと満たされる。

「フツ……今更この身、どうなろうと構わんさ……、ただ、どうせなら闇に吞まれる前に吞んでやろうと思ってなあ……」

とかなんとか色々と考えていたが、どうにも男はどうしても私と契約したいらしい。

……仕方ない。

契約しなければ元の姿に戻してはくれないだろう。

「なら、跪け」

私が地面を指差すと共にそう言えば、男はゆっくりと跪く。

……………。

……………。

契約ってどうやるんだっけ。

いや、知らないワケではない。忘れたダケであってだな……。断じて知らないワケじゃないぞ。本当だからな。

……まあいいか、たぶん大丈夫だろう。

互いが契約してると思ってたれば……。

「よし、もういいぞ。これで貴公は今日から『貪り続ける者』だ」

「ほう、なるほど……さしずめ『貪り続ける者』^{ニーズヘッグ}といった所か……

……で、名前は？」

……………うん？

男の様子が急に変わったぞ。何だ？ 二重人格か？

それに名前ってなんだ。意味が分からないぞ。

「……何？」

「だから、お前の名前はなんだ。と聞いているんだ……」

……………うん？

名前？

こいつは何を言っているんだ。

古竜に個別の名前などあるわけないだろうに。

……脳みそまでカビてるのか？

「名前など無い。……何せ私は古竜の子孫だからな」

「……もう乗らんぞ、ほら、さっさと自分の家に帰ったらどうだ？」

……んん？

自分の家……って、あの大広間か？

……いやいや、どうやってここに連れられて来たか分からないし。
というか、あれ家か？ いや、違うだろう……。

それ以前にこいつ……自分で召喚しといて帰れとは。ゴミ召喚主^{ホスト}だな。

「……家も、ない」

「……何？　じゃ、じゃあ両親は？」

両親……？

古竜にそんなものが居るわけないだろう。

こいつはこんな中途半端な知識で私を呼び出したのか？　……
んな見た目にしてまで。

信じられんな。

「親など居るはずがないだろう」

「なあっ……！？」

男がものすごいショックを受けたような顔をする。

……何をそんなに。

元々古竜とはそんなものだろう？

「……本当に名前もないのか？」

「だから無いと言っている……。それよりも早くもとの姿に戻してくれ、こんな懦弱な姿で過ごしたくはない」

「元の姿って……、何だ、それは」

「なっ……！？ 貴様、自分から変えておいてそれはないだろう！
？ 私の本来の姿だ！」

私が再び男を指差しながら言うと、男は顔を引きつらせて固まっている。

……なんでそんな顔するんだ……？

まるで、そんな顔されたら……本当に何も知らないみたいじゃないか。

「……恐らく、だが。その姿を俺は見えない」

「な、何を……」

不安が生まれる。

それと同時に。

何か、とても重要なことを忘れているような……。

そんな感覚に陥る。

「君は、家の裏庭に倒れていたところを……俺が拾ったんだ」

「は……？」

うら、にわ？

……。

ゆっくりと思い出す。

白い世界で。

私が見た文を——。

『——人間となり、別の世界へと侵入します——』

——ああ、なるほど。

そういう、ことか。

落ち着いて外の風景をしてみる。

……明らかに違う。

何も、かもが。

……………。

恐らくここは、ロードランの地ではない。

ロードランの地がブレて出来上がった平行世界でもない。

そのロードランの地とその周辺の世界を一括りにし、そこから離れた大きな括りの世界だ。ここは。

古竜も。

怪物共も。

不死者も。

神も。

私の知るモノは何も存在しない場所、そう。きっとここはそんな場所だろう。

「は、はは……」

思わず崩れるように座り込む。

何故だ？

何故……？

どうして、こんなことに……？

02 一片道切符（後書き）

おかしいな、ゆるほわ貪食系じゃない。

……ゆるほわ貪食系がどんなものか知りませんが……。

03 一裏側（前書き）

二話の尚紀視点。手抜きとも言ふ。

03 裏側

俺はただ、部屋の中で椅子に腰を掛けて休んでいた。

……昨日の晩は散々だった。

結局俺はあの後買ってきた下着を少女へと着せ、更にはボロボロになった足で少女を背負って二階まで運び、ベットに寝かせた。

それでようやく一安心し、すこし眠りについた後、必要はないと思うが、少女が記憶喪失だったり（こちらはワリと考えられるかもしれない）転生者だったり（こちらでも否定できない、何せ真夜中に全裸で美少女が裏庭に落っこちているなど常識の範囲を既に超えているからだ。決して俺が厨二病だからではない）した場合のことを考えて三週間分の有給を取った（この時つくづく普段使ってなくて助かった、と思った）。

ちらり、と横を見る。

そうすれば未だに死んだように眠る少女。

……脈はあるから死んではないのはわかっている。

だが、どう見ても死んでいるようにしかみえない。

「……んう……？」

と、そんなことを思っていたところ。

少女が目を覚ました。

喜び、そして同時に不安も覚える。

もしも少女がマトモな少女だった場合……俺はナニカサレる。通報的な意味で。

だが、今更引けない。やるしかない。

「やっと目覚めたか……
グッナイ・ホワイトプリンセス『眠れる白姫』よ……」

適当な名前呼びつつも、立ち上がって近寄る。

少女は強酸性の液体のような毒々しい眼でこちらを凝視していた。そしてその表情は驚愕。

……あ、これ。ダメなパターンでしょうか？

そう思った矢先、最悪にも俺の考えは的中していたようで……少女は勢いよく後ろに下がり、俺から距離を取ろうとするが――。

「あ、バカ、そっちは――」

「んひゃあっ!？」

――俺の制止の声も空しく、盛大に落っこちた。

一瞬の間があって、ごどん、と盛大な音。

……恐らくは背中を強打したのだろうな。……俺なら十分は悶え続ける痛さだ、きつとこの少女も悶えるに違いない。

と、思ったが。少女は落ちたときの体勢のままガラスを凝視したまま硬直していた。

……何を見てるんだ？

そう思って俺もガラスを覗いてみるが、ガラスの向こう側はいつも通りの平和的かつ退屈な光景。

が、どうにも少女は町並みを見ているわけではなく、ガラスに映った自分の顔を見て硬直しているらしかった。

……雲行きが怪しくなってきたな……。

「は……？ あえ？ え？ は？ あ？」

短く息を吐くような声を出しながら少女はガラスへと体を押し付けつつ、立ち上がる。

まずい。これは面倒なことになったかもしれない。

……とりあえずマトモな終わり方はしなさそうだ。

そう思いながらも少女の様子を伺うと、ペタペタと自分の体を触

りつつガラスに映りこんだ姿を見て確認しているようだった。

「はぁ……！？　ハアアアアアアアアア！？」

そしていきなりの叫び声。

思わず心臓が止まるかと思った。

……本格的にこれはまずい空気だ。絶対これはマトモなシチュエーションじゃない……。

通報されてもいいから普通の展開がよかった。

「ど、どうした？　何かあったか？」

恐る恐る聞いてみると、少女は勢いよくこちらを振り向き、俺を睨んでいる。

敵意——というより殺意を剥き出しにして。

……どうやったらそんな可愛い顔でそこまで恐怖感を煽れるんだ！
そう思っていると、少女は俺の顔を指差してくる。

「お、オマエだなッ！？　私をこんな姿にしたのは！　呪術師か？
しかし、貴様。私をこんな姿にして……何を考えている？　陵辱
でもする気か？　ハッ、やはり能無しの小人共は考えることは分
らん！　いいか、とりあえずだ！　私を元の姿に戻せ！　今すぐ
だ！」

物凄い饒舌でよくわからないことを言われた。

陵辱て。しねえよ。俺は親父とは違うんだから。

というか、呪術師？

……ああ。

この少女も俺と似たクチか……。

少し乗ってやるか。

「クッ……、クククッ……中々の推理だ……。だが、違う。俺は貴様を擬人化させた挙句に陵辱しようなどと一切考えていない。……俺は貴様から力を借りようとしただけだ、そう『一貪食なる古龍の子孫（ゲイピング・アトモスフィア・オールドラコーン）』である貴様と契約することによってなあ……」

気持ち悪い笑い声と共に適当な設定を広げてみる。

これで満足か、厨二病患者（仮）の少女よ。

「……貴公、どうなるか分からんぞ？」

少女が疑うような表情で言い放つ。

……満足してない！？

むしろ乗って来た！？

どういうことだよ……。

仕方ない。もう少し乗ってやるか。

「フッ……今更この身、どうなろうと構わんさ……、ただ、どうせなら闇に吞まれる前に吞んでやろうと思ってなあ……」

自分で言っていて相当イタい。

……だが、これで少女も流石に引いただろう。そしてこの茶番も終わるだろう。

そしたら後は適当に名前とか聞いて家の場所聞いて。遠いようならどこかの施設に頼めばいいし、近いなら俺が送って行ってもいい。

「なら、跪け」

……終わらなかった。

地面を指差しながら少女はそんなことを言う。

こいつ、おそらく相当重症だ……。

だが、きつとやらないと満足しないのだろうから跪く。

……中学三年か高校一年くらいの少女に跪かされている……親父なら狂喜乱舞しそうなシチュエーションだ。

そして沈黙。

「よし、もういいぞ。これで貴公は今日から『貪り続ける者』だ」

……え、終わり？ 詠唱とかするもんだと思っていたが……。

よくわからん。

しかし、これでもう満足しただろう……。

「ほう、なるほど……さしずめ『^{ニースヘッグ}貪り続ける者』といった所か……

……で、名前は？」

流石俺だ。

物凄く違和感がある感じに聞いた。

少女も目を丸くして固まってるし。

「……何？」

「だから、お前の名前はなんだ。と聞いてるんだ……」

案の定聞き返してきたので、言い直す。

だが、少女は未だ目を丸くしたまま固まっている。

「名前など無い。……何せ私は古竜の子孫だからな」

……また厨二病かつ！

しかし、乗ると永遠に終わらなさそうなので、乗りはしない。

「……もう乗らんぞ、ほら、さっさと自分の家に帰ったらどうだ？」

多少突き放しすぎただろうか。

自分でも多少思うが、俺は何分人と話すことに慣れてない。

しかし、これで少女もきつと――。

「……家も、ない」

――何？

まで。やはりおかしくないか？

先ほどとは違い、静かな混乱に見舞われているような表情をする少女に、俺は違和感を抱く。

やはり、正常なシチュエーションじゃないのか？

「……何？　じゃ、じゃあ両親は？」

「親など居るはずがないだろう」

「なあっ……！？」

平然と、それが当然のように言う少女。

……やはりおかしい。

「……本当に名前もないのか？」

「だから無いと言っている……。それよりも早くもとの姿に戻してくれ、こんな懦弱な姿で過ごしたくはない」

『もとの姿』。

先程と同じ風に聞けばただの厨二病だと思うが、どうにも少女の声色は面倒くさそうであり、演技や嘘を吐いている風には見えない。

「元の姿って……、何だ、それは」

「なっ……!?!? 貴様、自分から変えておいてそれはないだろう! ? 私の本래の姿だ!」

もはや不安で満たされ、乗る気にもなれなかった俺が普通に返したところ、少女は焦ったような表情を浮かべつつこちらを指差してきた。

その表情は焦りと不安。

「……恐らく、だが。その姿を俺は見てない」

「な、何を……」

ゆっくりと、静かに返す。

少女はショックを受けたようで、自分の頭を自分の手で押さえながら、震えている。

……なんだこれは?

「君は、家の裏庭に倒れていたところを……俺が拾ったんだ」
「は……?」

少女が涙声で返す。

……なんだこれは?

「は、はは……」

しばらくして、少女は崩れるように座り込み、俯いてしまう。
どういう……ことなんだ?

04 一食（前書き）

貪食らしさの片鱗を見せる回。

04 一食

「どうということだ……」

先程から何度も同じ言葉を繰り返しつつ、俺は一階のキッチンでカップラーメン（最近人気の兄貴塩と弟味噌だ）に熱湯を注いでいた。

……先程から少女はずっと俯い黙り込んでいる。
その空気に耐えられなくて思わず飛び出して来たが……、どうにもまずい気がするので、何とかして理由をこじつけつつ戻ろうと思ったら『飯を作る』ぐらいしか思いつかなかった。

「……はぁ」

思わず溜息吐きつつ、お湯を注いだカップラーメンを両手に持ち、階段を上がって行く。

そして一段一段上がって行くごとに陰鬱な雰囲気は漂い始める。

……うわぁ、部屋の外までオーラ出てるぞ……これ……。

そしてそのオーラは扉の前まで来た時点で相当なものになっていた。

「は、入るぞ？」

自分の部屋なのだから確認することもないのだが、なんとなく確認してしまう。

……いや、こう……、そういう不可抗力みたいなものが染み出していてな……。

部屋に入ってみて後悔。

少女はベットの上で未だに俯きながら負のオーラを排出し続けて

いる。

……どういうことだ、おい……！

こいつ……（心が）死んでるじゃねえか！

なんて馬鹿なことを考えていないと、少女の今の服装とこの雰囲気からして俺が少女を強姦したみたいな考え、そして雰囲気に呑まれる。

していないのに。

していないのにつー！！

「お、おおい。そう気を落とすな少女よ……ほら、なんだ。何があった？　話してみる。話せば楽になるかもしれんぞ？」

「……」

少女が光の無い瞳でこちらを見ている。

うわあ。

これがリアルレイプ目か。

と、再び馬鹿な考え。

考えてないと以下略。

少女は何も言わなかったが、俺は少女の隣へと腰を掛け、カップラーメンとフォーク（もしかしたらこの少女が箸を使えないかもしれないのを考慮した。正直言って自分を褒めたい）を手渡す。

少女は一応受け取ると、再び俯いてしまう。

あ、ああ……カップラーメンの底が素肌に当たってる……絶対熱いぞあれ……。

しかしどうやら、この雰囲気だと話を聞くのは相当困難を極めるかもしれないな……。

「……私は」

とか思っていたら、ボソッと喋り始めた。

よかった、少しは気が楽になる……俺が。
だが、陰惨な話でないことを願う。俺はそういうのが非常に苦手だ。

「……いや、やはりこの話はするべきじゃない……、したところで、お前は私を狂人だと思うだけだろう……」

やっぱりだめだったッ！

……しかし、俺のかなり個人的な意見と、偏見。そして常人離れた思考が言うには……。

おそらく、この少女は異世界から来た……んじゃないか……？

何せ、まず最初に見つけたシチュエーションがおかしすぎる。

今日の朝に確認して分かったが、俺の家の裏庭は非常に狭く（というか裏庭というより空きスペースだ、あれは）、更に自然に生えてきたよく分からない植物とやけに横に広い天井のせいで上から裏庭に入ることが不可能だ。

……少なくとも、落ちる音以外何も音を立てないでは。

なら……『突如虚空から現れた』というのがもつとも正しい解釈じゃないだろうか。

そして、次に少女の容姿だ。

髪色……まあ、これは染色ならこんな光り方もするだろう（それにしても不自然だが）、だが、目の色だけは異常だと胸を張って言える。

何せ、人の瞳の色は大きく分けて八種類ほどしかない。

確かにその中には黄色っぽい瞳もある。

だが、それも黄色というよりは黄緑だったり、オレンジに近かったりする。……だが、この少女の瞳は明らかに『黄色』なのだ、通常なら絶対にあり得ない色……だと思う。Wiki先生を流し読みした限りじゃ。

……全然胸張って言えてないな。まあ、いいか。

「……そうか、まあ……、話したくなったら話せ、決して笑いなどしないから安心しろ」

「……なぜだ？」

「だって、俺はお前の『契約者』なのだろう？」

「世迷言を……」

少女がやぶ睨みで此方を見つつ、そんなことを言ってくる。

よ、世迷言で……。一度しか言っていないぞ。

というか今時世迷言なんて言葉使う少女なんていないぞ……。こいつ絶対転生者だろ……。流石転生者古臭い。

それにしても相当ドライだ。この少女。それこそ凍傷しそうなぐらいに。

「ま、まあ。とりあえず食え、食えば……。いくらかマシになるかもしれないぞ」

「……」

少女は此方の顔をじつ……。と見つめてくる。

その瞳は獲物を見つけた毒蛇のような冷徹さが籠っており、俺は思わず体を若干引く。

な、なんだ……。？ 何なんだ？

「お、俺は食うなよ……。？」

「……チッ」

なんとか場を和ませようとして冗談気味に言ってみたところ、少女は本当に不機嫌そうに舌打ちして俺を見るのをやめる。

……。俺を食う気だったのか！？ カニバリズムもいいところだぞ……。！？

少女は俺を既に見てはいないが、だんだん怖くなってきた。

この少女は……実は怖い人なのかもしれない……。

いや、さっき自分のことを『古竜』とか呼んでいたから……転生者だと仮定すれば元々は人肉を漁り食い続ける恐ろしい竜だったのかもしれない……。

「……これは、どうやって……食べばいい？」

とか何とか思っていると、どうにも少女はカップラーメンの対処にてこずっているようだった。

決定した。この少女は絶対転生者だ。カップラーメンを食べない日本人など存在せん。

「てこずっているようだな、手を貸そう」

かつて中学生のころに酷く夢中になっていたゲームの台詞……だったようなものを言いつつ、少女が手に持つカップラーメンの蓋を開け、中を指差す。

そうすれば、少女は意外と頭が回るのか、一緒に渡したフォークを使って麺を取り出し、ゆっくりと口へと運ぶ。

……ああ、熱いぞあれは。火傷する。うん。

そう思っていたが、少女は平気な顔で麺をズルズルとすする。

……どうせ俺が猫舌なだけです。ええ、悪かったね。

俺のコンプレックスを無意識のうちに突いたことなど気にもしない少女は麺をすすり終わると、もしかしたらと租借し飲み込むと動きを止め――。

――涙を流していた。

「ど、どうした？ 熱かったか……？」

「美味い……」

「……はい？」

「……これほど美味しいなど……恐らくは庶民には手が届かないほど高いのだろう、貴公……さては王族だな!？」

先程までの陰鬱な雰囲気は何処へ行ったのやら。

久しぶりにまともな食事を与えられた欠食児童のように少女はラーメンへとがつつきながら意味の分からないことを言ってきた。

……王族って、いつの時代の一族だ。

「いや、庶民だが……ついでに言えば、それは最底辺クラスの食品だぞ」

「なん……だと……?」

目を丸くして俺の顔を凝視している。

……意外と表情豊かだな。先程までは死んだように無表情だったか、こうイロイロと表情が出てくると結構可愛いかもしれない。

「まさか……、此方の世界にはこれほど美味しいものが数千と存在するとも言うのか!？」

「いや、まあ。一応」

フォークの先端を此方へと向けながら少女は攻め立てるように聞いてくる。

危ない、やめろ。

……それにしても、此方の世界とか言っちゃったよ、この子。しかしまあ、カップラーメン如きでここまで騒ぐとは……何を食って生きてきたんだ……?

「この名前はなんと言う……?」

「ああ、これか。これは『K－u p・ラ・メイン』と呼ばれる代物

でな……作り上げられたのは中世時代。その時代のウィザード級錬金術師共が知力を尽「貴公のもよこせ!!」貴様アアアアアアアアアアアア!

神速が如き速さで完食したらしい少女が俺の持っていたカップラーメンを分捕る。

おい、さっきまでの陰鬱な雰囲気は何処へと消えた。M78星雲か?

奪い返そうとも思ったが、あまりの速さで食うので思わず手を出せなかった。

だって……まるで飲むような勢いで食うんだぞ? しかもちゃんと租借して。

熱くないのか……!?

というかカップラーメン二個って、正直言ってその体格の少女の摂取するカロリーじゃないだろ。

そんな俺など知らぬとばかりに、ゴクゴクといい音を立ててカップラーメンを飲む(決して間違っていない)少女だったが、ついに二個目も食べ終わったらしく。ゆつくりとカップラーメンの容器を口から離れた少女は、けふつと息を吐きつつ此方を見てきた。

……食われる?!

そう思ったが、別段そんなことはなく、俺を指差してくる。

……先程もフォークの先端を向けてきたような気がするし、もしかしたら癖なのだろうか。

「貴公は……私の契約者だと言ったな?」

ゆつくりと、蛇の如き笑みを浮かべつつ少女が問いかけてくる。

……いや、お前自分から『世迷言』とか言って否定しただろ!?

「世迷言だと言っ」

「黙れ食うぞ」

「はい、契約者です」

あまりの気迫に思わず頷いてしまった。

『……年下の少女に押される男の人って……』だど？ いや、物凄
い気迫なんですって。

「ならば、私は貴公を従える権利があるわけだ……」

「いやな」

「黙れ食うぞ」

「ありますとも」

……だから物凄い気迫なんだって。もうほんと。そこらのマフィ
アのボスぐらい。

マフィアのボスを見たことはないが。

「よし、ならば貴公。今日今この瞬間から私をこの家に住ませろ、
それと十分な食料をよこせ」

「ハア！？ 何言っ」

「黙れ殺すぞ」

「どうぞお住みください」

ついに食うから殺すになった。

……俺、何か悪いことしたか……？

「それとこの世界の最低限の知識も全てよこせ」

「いいか、俺は面倒が嫌」

「殺す」

ビックボックス

「我が家へようこそ！ 歓迎しよう、盛大にな」

満足げに微笑む少女。

ああ、なんで押されてるんだよ……そして何で住ませてるんだよ
俺……。

これは……面倒なことに……なった……。

04 一食（後書き）

よもや、これが朔咲尚紀が主軸となる話は最後だとは……誰も思うまい。

……誕生日に何書いてるんだろう、私は。

05 一買い物(前書き)

前回は朔咲尚紀主観の物語は最後と言ったな……？
あれは嘘だ。

あと、今回なんか長いです。前回までの大体1.5倍程度の文字数です。

05 ー 買い物

——な！？ ま、まて、落ち着くんだナオキ。ダ、ダメだ。まだ早い。そ、そんなの……。

——何を言っているんだお前は、もう十分だろ？ それに、お前だって我慢のし過ぎで苦しそうだがなあ？

——そ、そんなことはないッ！ く、苦しくなどっ……！！

——口ではそう言いつつも……、体のほうは疼いてるみたいだが？

——で、デタラメを言うな！ た、頼むから……頼むから、もう少し……もう少し時間をくれ……。ま、まだよく知らないんだ。私は……。

——この程度のことで一々グダグダしてたら前には進めんぞ？

——だ、だがっ……！！ 頼む。許してくれ……まだ、心の準備が……っ！？ な、何を？

——お前が余りにもグダつくから多少強引に行こうと思ってな。

——なっ！？ や、やめろっ！！ い、いやだッ！！

——ダメだ、流石に俺も我慢の限界なのでな。

——いっ……！？ い、痛い……痛い痛い痛い！！

——痛いワケがないだろう？ 数日前に『あ、私。痛覚死んでるわ、これ』って言ったのは何処のどいつだ？

——ほ、ほんとうに痛いんだ……許してくれ……、痛い……痛い……。

——それは痛いと思うから痛いんだ。安心しろ、慣れたらそのうち楽しくなってくるさ。それに、気持ちいいぞ？

——気持ちいいわけがないっ……！！ こんなにも辛いのに楽しくなるわけもないっ……！！

——ほおら、もうすぐ辿り着くぞ？

——嫌だああああ……いたいいたい……。

——ふむ、もう出せるか……。

——なっ！？ やめろっ……！！ 出すなあっ！！

——いいや、限界だ。……外に出すぞ。



「……ふう」

空が、今日も青い……。憎たらしいな。まったく。人類を滅亡させたくない……。

「うああああああ……酷い……こんなの酷すぎるう……!!」
あんまりだあああ………!!」

下から呻き声。

俺が空を見上げるのをやめ、見下ろせば泣き喚く件の少女——
いや、ミラがいた。

……コイツの名前は『ミラ・ファールゴサイト』ということにして
おいた。

何時までも『ジョン・ドウ』だとか『U・N・オーエン』とか呼
んでいるワケにもいかなしな。

……ちなみに真名は『グイピング・アトモス・ドラゴン貪食なる古龍の子孫 ミラ・カウリオド
ース・リ・クリエ・ファールゴサイト・ダグヴァ・ゼヴァ』だ。

うむ。実にすばらしい名前だ。

まあ、世間を気にして普段は『ミラ・ファールゴサイト』と名乗る
ように言っておいたがな。

「何をそんなに騒いでいるんだ。たかが外に出したぐらいで」

「きちくう………あくまああ………!!」

「お前が毎日毎日食物を漁ってばかりだからそうなるんだ」

「ちゃんと参考書とかで勉強してたじゃないかああああ……」

「ああ、俺を使いつ走りにして手に入れたのでな」

まったく持って散々だった。

何が悲しくて一日中駅前の本屋と家を自転車で行復しなければな
らんのだ。

しかも飯も無茶苦茶食うし。……昨日なんか何食わせたか俺が覚
えてない。品数が多すぎて。

……まあ、そんなこんなのにライラが連なって勢いでやってしま
った。

後悔も反省もしてない。する必要がない。

「最低最低最低最低最低最低最低最低最低最低……」

「ああ、うるさいな、お前は本当に……母さんとか宮みやとかとは大違いだ」

「……宮って誰だ？ ああ、彼女か……、昨日も電話していたしな……」

「妹だよ！ 世界で一番怖い！」

「妹に怯える男の人って……」

「黙れ引き籠もり」

「今外に出たからもう引き籠もりじゃない。残念だったな」

……ムカつく。

そう、俺は今この瞬間。家の中にひたすらに引き籠もって知識と食物を貪り続けていたミラを無理矢理外に出してやった。

別に何もやましい事はしていない。俺は親父とは違う。

おい、そこで見ている中年女。強姦魔を見るような目で俺を見るな。

「……で、この私を無理矢理外に出させて何をさせる気だ？」

「まずはお前の服を買う」

「この服があるじゃないか」

そう言いながらミラは自分の着ている高そうな白い……よくわからんヒラヒラがいっぱい付いた服の端を引っ張る。

やめろやめろ。それは宮のなんだ。破れたりでもしたら俺は人がすっぽり入るサイズの電子レンジの中にぶち込まれてワンボタンでチンっ♪されてしまう。

「お前のじゃないだろ」

「……にしても妹のものだろう？ 貰ってしまえ」

……こいつ、絶対借りたものを返さない人種だろ。
笑顔で言うミラを見て確信した。絶対違う。

「ダメだ、お前はアイツの怖さを知らないから……そんなことが言えるんだ」

「そんなに怖いのか？ お前の妹は」

「ああ、怖いとも……」

そう、あれは一昨日の出来事だった。

ミラに合わせる服が何もなく、俺のYシャツを着せていたが、なんとも犯罪の香りしかなかったので覚悟を決めて妹へと電話したんだ。俺は。

……しばらくして、我が妹は気だるそうに応答した。

だから、俺は言ったんだ。

——お前の服を貸してくれ。と。

そうしたらあの妹は相変わらぬ声のブレの一つもない見事な棒読みでこう言ったんだ。

『へえ、ついに兄貴にも女ができたか。……バカらしいねえ。彼女や友人……そんな関係、氷の味より味がないってのに……愚かだねえ、愚かだねえ……』

正直耳が死ぬかと思った。そして何故俺が他のヤツに服を貸そうとしてるのが分かった。何も言っていないのに。

……ちなみにそんな俺の妹の口癖は『頭が悪そうなヤツといい関係結ぶのに二千元……親とのダラダラした関係を良くするのに五千元……ファミレスで氷を食うの、プライスレス』だ。

もう意味がわからない。何がしたいのかも分からない。
分かるのは唯一つ。……生物的逃走本能が騒ぐってことだけだ。

……でも、アイツはなぜか学校で人気あるんだよな……友人三柘突入するもんな……なんでだろうな……。

ちなみにあだ名は『絶対零度彼女』クラスメートらしい。……どこの漫画だ。

しかも全然合っていないし。

「そこまで怖いかねえ」

「怖いんです」

「信じられんなあ」

とか何とか言いながら俺とミラは最寄のショッピングモールへと向かう（ちなみに名前は忘れた……レ……レゾ……レゾナンス……いや、レガリア・クラウンだったか？）。

その品数は相当なもので、そこに行つて無ければ、この町には存在しない……と言われているとかないとか。

……ちなみにそのショッピングモールは俺の家から徒歩三分だ。更にはそのショッピングモールは駅とほぼ一体化してるので、駅までも徒歩三分ということになる。

そう、俺の家はとても立地条件がいい。

更には俺の働いている『鉄板ハイエナ社』の本部にも徒歩十分という驚異的な近さ。

……なのだが、家賃は非常に安い。平社員の俺でも余裕で支払える程度だ。

理由？ 考えたくも無い。考えたら眠れなくなる、たぶん。

……俺はホラー系の話が苦手だ。

「……人が多いな……」

いろいろとイヤな想像をしていたところ、ミラが辺りをちらちらと気にしながら呟く。

そういえば、この間一緒に風呂に入った（コイツが一人で入れる

確証がなかったであり、決して他意はない。俺は親父とは違うのだ。ちなみに肌は無茶苦茶スベスベしてた）時に聞いた話じゃ、どうにもミラは『こちら』に来る前は悍しい姿をした古竜の子孫で、生まれて育った場所（ミラは大広間と呼んでいた）から出ずに過ごしていたとか……。

ハッキリ言って絵空事のような信じられない話だったが、信じるしかないので大体信じた。

「どうした？ 緊張してるのか？」

「全員食いたい」

「やめろ。そんなモノは大量虐殺スローターの親戚でしかないぞ」

……あと、ついでに聞いた話じゃ主食は人肉で好物は人肉でご馳走は人肉だったらしい。

カニバリズムもいいところだ……。

いや、もとは古竜だったから違うのか……。

「安心しろ、一分冗談だ」

「たった1%しか冗談じゃないのか!？」

得意げそうな表情で言うミラ。

そういうのを本気って言うんですよ、ミラさん。

「騒ぐな、一緒にいて恥ずかしくなる……」

「夕飯抜くぞ」

「ナオキ……お願いだから死ぬまで一緒に居てくれ」

呆れ顔で言ってきたのが妙にムカついたので、軽く脅してやったところ俺の体に重心をちょっと寄せつつ上目遣いで真逆の意見を言ってきた。

……コイツにはプライドってものがないのだろうか。

……それにしても、死ぬまでか……。それはそれでイヤだな……。死ぬまでコイツの食費を払い続けるのはちよつと……。

絶対借金まみれになる。

とかなんとかバカなことやりつつ……無事ショッピングモール『レゾナンス』に到着した。

レゾナンス……呪いの言葉か何かか？ 恐らく『コロツケ』や『コケコツコー』と同類に違いない。

「な、ナオキっ……」

なんてどこぞの妄想を具現化させる物語を思い出していると、ミラが突然震えた声で俺の名前を呼ぶ。

「どうした？ ミラ」

何かあったのかと思って一度立ち止まり、ミラの表情を伺いつつ聞いてみる。

……物凄く目にいっぱい涙を溜めて絶望に満ち溢れた顔をしていた。

……?!

「すごくっ……おおきっ……いっ……!!」

「いや、まあ。大きいけどな」

ミラはショッピングモールを指差して震える声でそう言う。

……何かとんでもないことがあるのかと思ったら、そうでもなかった。

思わず俺は拍子抜けして普通に返す。

「怖い……!!」
「怖い!？」

普通に返したところ、ミラが急に意味の分からないことを言い出した。

……確かにこのショッピングモールは大きいが……。
ショッピングモールを見て怖いって言うやつ初めて見たぞ!？
しかし、演技でもないらしく、ミラは俺の右腕にぴったりとくつき、ガクガク震えている。

……ええー……。なんでえー……？

「怖いはない……怖いはない……絶対にそれだけはない。うん。無いぞミラ。流石に同意できない」

「だ、だっ……。てっ……。!! 私っ……。私の下口より大きいよおっ……。?！」

……たぶん、下の口ってのはミラが元々の古竜の時の姿の時に胸部から下腹部にかけてあったと言っている『大口』のことなのだろう。

断じて卑猥な意味ではない。

……おい、その中年男。ニヤつきながらこちらを見るな。ロリコン死滅しろ。

「まあ、安心しろ。襲いはしてこないさ」

「だ、だけどっ……。は、入るのっ……。!？ 入っちゃうの……。っ!？」

「入ります」

「いやだああああ……。!! 入らないよおおお!!」

「何故泣く!？ いや、入るからね!？ お前の意思関係ないからね!？」

「無理だよお……………入らないよおお……………」

右腕が何か湿ってる。あ、きっとこれはミラの涙に違いない。

…………マジ泣き!?

シヨッピングモールに入るだけでここまで泣くヤツ初めて見たぞ
!?

「っていうか、右腕が痛いんだが…………血も止まるんだが…………離してはくれないか?」

「はいらないいいいい…………むりだよおお…………おおきすぎるよおおお……………」

聞いちゃいねえ。

…………ちなみに、胸が皆無なので『あててんのよ』みたいなウラヤマシイ状況にはなってない。

まあ…………。

貧乳の控えめな感じは好きだけどな。

などと考えつつ、未だに泣き喚くミラを無理矢理引きずりつつシヨッピングモールへと近づく。

…………おい、そのガキ共、指差すんじゃない。そして母親らしき女、軽蔑の視線でこっち見るんじゃないやねえ。

「…………入るけど、大丈夫か?」

「大丈夫じゃないよおおおお…………無理だよおおお…………!!」

「そうか、大丈夫か」

「鬼畜ううう!! 悪魔! 鬼イ!! いやだああああああ!

! 無理矢理入れないでえええええええ!!」

…………もうコイツ確信犯だろ。

俺を殺しに来てるな?

……ああ、大丈夫ですその警備員さん。私はいたって善良な市民です……警棒なんて取り出さなくてください！ 俺は何の棒も取り出してませんから！

警備員に曖昧な笑みを向けつつ開いた自動ドアを通過し、俺はミラをショッピングモール内に無理矢理押し込む。

入った瞬間。ミラは一気に静かになる。

……なんだ？

「……まったく、このショッピングモールは無駄にデカいな……。大きすぎる、修正が必要だ」

いきなりキリッとした表情になって『ヤレヤレ』と呆れたポーズをしながら言うミラ。

「おい、お前……さっきまでとまるで様子が違うじゃないか」
「フッ………内側に入ってしまったえば大きさは分からない。つまり怖くない……」

ドヤ顔で自信満々に言ってくるミラ。

なんだコイツ。

ここに捨ててやろうか。

「さあて、ナオキよ。私の服を買うんだろう？ 早く行くぞ」

「ミラさんミラさん。あなたは俺に謝ってもいいんですよ？」

「何を言っているんだお前は？ 脳みそまでカビたか。よく生きられるものだな、それで」

……本気でここに捨ててやろうか。あるいはショッピングモール前の電柱に括り付けとくか？ ……いや、それはダメだ。さっきの中年男みたいなロリコンに襲われる。

こんなに中身はアレなのに見た目は可愛いんだから世の中つてのは不思議だ。……どっちかっていうと俺の妹に友人が多いほうが不思議だが……それはまた別の話だろう。アイツだから黒魔術とか使って洗脳してるに違いない。

「……はあ。まあいい……、行くか」

「さっさとしろ木偶の坊」

「……」

一発殴りたい。

……まあ仕方ない。殴ってさっきから此方をマークしてる警備員に取り押さえられたら俺はブタ小屋行きだ。

我慢しよう我慢。……代わりに今日の風呂でこれでもかというほど嫌がらせをしよう。シャンプーを泡立たせたまま放置とか。

……俺って……やな奴だな……。

あと、素手にボディークリーム塗ったくって洗って羞恥心に陥れる。なんていうことを考えたエロゲ脳の持ち主たちよ。……それはミラに期待しないほうがいい。こいつは羞恥心皆無だからな。しかも集中しないと痛みすら感じないほど触感死んでるし。

「どうやら衣服類は上みたいだな」

ショッピングモール内の案内板を見ながらミラが呟く。

上か……面倒な。一階に置いておけよ。

とかなんとか思いつつ案内板に階段のマークが記された場所へと向かう。

別に階段を登るワケじゃない。階段マーク以外に案内板には何も書かれていなかったただけだ。

……なんだこの店。

そして案内板から歩くこと大体三分。

「ナオキ、階段とエレベーターとエスカレーターとハシゴがあるぞ。どれにするんだ？」

「ハシゴ!？」

「あ。あと登り棒もあるぞ」

非常に奇妙な光景に直面した。

……なんとも意味不明なことに数々の上へと行く手段が用意されていたのだ。

「ここは一体なんなんだ!？」

「ショッピングモールだろ」

いやそうだが!

登り棒って何だよ!？ 誰が使うんだよ!？ 消防士か!？

それとハシゴも意味分からん! っていうかハシゴ高い! 見上げてても頂点が見えんぞ!？

というか、その隣に同じ長さの登り棒。

……SASUKEでもやる気ですか、このショッピングモール。

「……ここは……無難にエレベーターだろ、ちやうど今来たし」

「私は折角だからこの赤い登り棒を選ぶぜ」

「……先に言うておく、ミラ、お前死んだぜ」

チーン、という聞きなれた音と共にエレベーターが到着し、扉が開く。

中には誰もいない。うん、流石平日の朝。誰もいねえや。

俺は戸惑うことなくエレベーターへと入り込む。そしてミラも戸惑うことなく登り棒へとつかまる……マジでやるのか……上のほうまで行って落下したら死ねるぞ、あれ。

なんて考えつつ、上へと向かうボタンを押し、扉も閉める。

しばらくしてゆっくりとエレベーターが上へと上がっていく。

どうせまだミラは下でモゾモゾやってるだろうから、上に着いたら見下そう。そうしよう。

そう思うと内心笑いが込み上げて来て、思わずニヤける。

アイツを上から見下す気分は最高に気持ちいいだろうな。そう思っ
て今か今かとエレベーターが到着するのを待つ。

待ちに待ち焦がれて、ようやくエレベーターがその重い扉を開いた。

——よし、思いっきり見下すぞ。

「遅かったじゃないか……」

——なんでもう到着してるんだよ、バケモノかよ。

エレベーターが到着したときには既に青と白のストライプ模様の
逆三角形の下着を惜しげなく世に晒したミラが腰に手を当てて薄い
胸を張って仁王立ちしていた。

……うん？ 何で下着丸見えなのこの子？

「お前……下半身……」

「あ、悪い。服は登ってる途中で破けた」

「貴様アアアアアアアアアアア！」

ああ、確かその服は——宮のだったなあ……。

直後、俺の脳裏に皆既月蝕によって真っ赤に染まった月、そして
その月の明かりを受けて真っ赤に染まった草原にて俺の妹——朔
咲宮が日本刀を片手に高笑いしている光景が映る。

……その日本刀は何故か赤黒い何かがベツタリと付着していた。

……死んだのは俺ってか？ ハハ。そのとおりだよまったく……。俺死んだ。俺終わった。楽しかったこの人生。思い残すことは未

だに童貞なことか。

「まあ、私の下着見れたんだからいいだろ」

そんな俺の気など知らず、ミラは堂々と言い放つ。
こいつ分かってないよ……。

「……ミラ先生。下着はですね、ただ見えれば嬉しいってワケじゃないんですよ。履いている子が恥ずかしがって、美しいものへと変わるのです。堂々と晒されてちゃあ何にも変わりません」

「どうでもいい。さっさと服をかうぞ。足が寒い」

自分で振っておいてそれかよ!?

しかも足が寒いって……自業自得だろ……、しかも一番損してるのは俺だし……。

……そしてオイ、その中学生。写メ取ってんじゃねえ、その高そうなスマートフォンに穴空けるぞ。

「はああああー………お前置いて一人で買いにこればよかったよ」

「まったくだ、だから私は抵抗したというのに」

「……貴様……後で覚えてろよ……風呂で地獄を見せてやる」

「フツ、無駄だ、私は感じんし恥ずかしがりもしないッ! よって風呂での悪戯は全て無意味なのだよ! クアハハハハハハハ!」

……なんとしてもコイツを屈服させたい。何かいい方法はないのか———?

05 一買い物（後書き）

次回、変態企業の社長が顔を現す……かもしれません。

06 一買い物／続（前書き）

今回変態企業の社長が現れると言ったな……？
あれは嘘だ。

06 一買い物／続

俺は失念していた。

——ミラと共に衣類のコーナーに辿り着いた俺は即座にそう思った。

何故なら——。

「で、ナオキ。どういうの買えばいいと思う？」

「……さあ……？」

——俺達二人はどちらもファッションに非常に疎かったからだ。

「ええい、役に立たない契約者だなお前は！」

髪をクシャクシャと掻き回しながらミラが若干棘のある声でそう言う。

ほう、日頃からメシと寝床……その他イロイロを無償で恵んでもらってる奴の台詞か、それが……。

面白いことを言う。

「ミラ君。今日中に荷物をまとめてね、明日から俺の家に君の居場所ないから」

「おいこらペットを捨てるな。こんなメス犬滅多に居ないぞ？」

自分で自分のことをメス犬呼ばわり！？ やっぱりこいつ、プライドがないな……。

いや、もしかしたら俺のことをバカにしているのかもしれない。自分も若干恥ずかしいが、俺をバカにし、俺がそれで満足するような表情をするのを見て心の中でほくそ笑んでるのかもしれない。

試すか。

「犬は『わん』以外言わないと思うが？ それに二足歩行もできないだろ」

「わんわんわんわん！ はっはっはっはっは……わんわん！」

地面をシャカシャカと両手両足を使って四足歩行しつつ、わんわん言うミラ。

……ああ、コイツは本物だ。プライドなんてモノ存在しない。

「お悩みですか？」

どうしたものか、と俺が唸り、未だにミラがわんわん言っていると、見事な営業スマイルで女性店員が話し掛けてくる。

お、これは助かったかもしれない。何とかしてミラに似合うモノを……。

……いや、それ以前によく話しかけられたな。下半身下着一枚でわんわん言いながら四足歩行でグルグルと回っている少女の横に立っている俺に……。

「ああ、私みたいなクズでゴミみたいな見た目ぐらいしか取り柄のない淫乱メス犬に似合う服を探してな……」

俺が今にも答えようとしたところ、すくっとミラが立ち上がって至って真剣な表情で意味不明なことを口走る。

「どうぞ、ごゆっくりお選びください」

意味不明なことを口走りだしたミラを明らかに避ける形で女性店員が去っていく。

なんてことを……。

ちなみに引き際も営業スマイルを崩さなかった。……あんたはよくやったよ。チップの制度でもあればチップを渡してもよかった。

「なんだ……あの店員は……ちゃんと調教されてないな」

しかし、原因となったミラは呆れるような視線を店員へと向けつつ、とんでもないことを口走る。

こいつ、大物だわ。

「……いや、明らかにお前が悪い」

「何をう。私は悪くないぞ。絶対に」

不満そうに唇を尖がらせつつ言うミラ。

……いや、どう見てもお前が悪い。それ以外何もない。

とか何とか考えつつ、適当に手にとっては見比べ、手にとっては見比べを繰り返してみる。

全部似たり寄ったりな感じのデザインだな……とか思いつつ見比べを進めていると――。

何か他の衣類とは違い、何か……こう……オーラというか、覇気というか。

なんとも言い表せない気配を漂わせる衣類に出会った。

恐る恐るハンガーを取り、その衣類の全体像を確かめる。

基本的な形は黒いロングパーカー。

……だが、何か、良くない思考に取り付かれたのか、ジッパー部分全般にキバでもイメージしたかのような三角形の白い布が陳列し、フードの頂点はヘビの口の上半分のようになっている。更には背中には若干大きめ（それでも動きの邪魔にならない程度で前から見れば大してわからない）のコウモリの羽のようなものが二対。そして丁度腰辺りにガラガラヘビを彷彿とさせる縞模様の入った尻尾。

……あまりいい趣味とは呼べないような服だ。だが……非常に似ている。

ミラから聞いたミラの過去の——元の姿とやらに。
これを買ったら喜ぶだろうか？
そう思っ値札を見る。

『57600』

あ、こりゃ無理だわ。バカ高エ。法外すぎる。……というか俺の財布が壊滅する。

戻そう。ミラには悪いが流石に無理だ。
今すぐもとの場所に戻そ——。

「ほう、すばらしいモノをお持ちだな……ナオキ？」

——戻そうとして手首をミラに捕まれた。

……終わった……。

さよなら、俺の財布の中身達……。

「買うか？」

「買わないと食い殺す」

ニカッという笑顔で恐ろしいことを言うミラ。

殺す宣言されてしまった……というか、やっぱり気に入ったか……

…アハハ。

あはは………。

「ああ、あとこれもな」

そういつてミラが手渡してきたのはネコだかイヌだかのミミがフ

ード部分に付いたロングパーカー……………。
お前もパーカー選んだのかよ！

「何だこれは……ネコミミロングパーカー？」

「違うな、貪食ハイエナパーカーだ。裏側の素晴らしい文字と値札
をってみろ」

いや……違い分かんねえから……。

言われるがままにパーカーを裏返すと、見事に白い文字で大きく
『貪食』の二文字が書かれていた。

……いや、まあ。お前は貪食を体现したような存在だけ……。
ここまでしなくても……。

お次に値札。バカ高いとかじゃないだろうな……？

『\22800』

高いiiiiiiii!!

貪食パーカーの半分以上だけどそれでも高いiiiiiiii!!
が、そこよりも更に目が付く場所があった。
製作メーカーの欄だ。

『鉄板ハイエナ』

俺の会社かよ。

こんなもの作ってたのか……？ 俺の会社は……。IS関連の会
社だったような……。

あ、ちなみにISというのは正式名称『インフィニット・ストラ
トス』と言うもので、元々は宇宙空間での活動を想定し、開発され
たマルチフォーム・スーツ……だったんだが、何でも日本に向けら
れて放たれた2300発ぐらいのミサイルをぶった切った拳句、戦

闘機や戦艦などの軍事兵器の大半を撃破したお陰で、従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能が世界中に知れ渡り、宇宙進出よりも飛行パワード・スーツとして軍事転用された……という妙な経歴を持つ『女性専用』の最強兵器だ。

そう、ISは女性以外に動かせない。理由は知らない。製作者の……篠ノ之……た、ターニャ？ 博士に聞いてくれ。

……このことを発表されてから以降世界が女尊男卑の世界が構築されたりもしたが、もともと嫌われてる俺には何の関係もなかった。だが……、飛行パワード・スーツなどという俺が中学生時代に『第00式 飛行型殲滅兵器 +グラム+』という名前で考えていた兵器が実現したのを聞いたときは『何で俺は女じゃないんだよクソがッ！』とお気に入り洋楽CDを真っ二つに割った記憶がある。……ああ、懐かしい。今から大体三年前ぐらいの出来事か……。あのCD、十万もしたのにな……何で割ったんだろうな……。

「ふん。どうだ？」

なんてイロイロと思い出したいくない俺の背負う悲しみを思い出していたところ、ミラは薄い胸を張りつつ腰に手を当て得意げそうにしていた。

……いや、何が！？ 鉄板ハイエナ社の商品だから何だよ！？

「あ、ついでにこれも」

そういつて手渡してきたのは割りとポピュラーそうな真っ黒なTシャツと薄茶色の短パン。

……値段？ どっちも五千円以下さ。

「なあ、ミラ。このパーカー二つとも買わずにこっただけ買わないか？」

「丁重にお断りする」

せんでいい！

思わずそう叫びたくなりもしたが、仕方がない……。

まるで足が鉛になったかのように進まなかったが、何とかレジまで持っていき、十万近い出費をする。

……財布の中身が全滅？ 二十秒足らずでか？

かなりの精神的ダメージを受けた。もうだめだ。

——と俺が落ち込んでいるのを余所目に——。

「あー……なんか腹が減ったな……」

——悪魔は残酷な言葉を呟いた。

「よし、ナオキ。飯にするぞ」

「それは、俺に死ぬと言っているのか？」

「は？ 何ボケたことを言ってるんだ、メシだメシ……お、あそこ
の店でいい」

呆れた様子のミラが指差すのは何の変哲もないファミレス。

……思わず一安心。

バカ高そうなステーキ屋とか見つけてなくてよかった……。

だが、それでも俺にとって致命的であることに変わりはない。

「……分かった、が……とりあえず俺は銀行で金を下ろしてくる。
だからその間に着替えておけ」

「よし、この貪食パーカーだけ着て後は全部脱ごう」

「いや、それはダメだろ！」

「何故だ！？」

「逆に何故それだいたいと思ったんだ！？ そしてその黒いTシャツ

と短パンを何のために買ったんだ!？」

「え、着るからだけど」

「分かってるなら着ろ! それと貪食パーカーを外で着るのはやめろ! せめてハイエナパーカーにしとけ!」

「口煩いやツだなあ、お前は」

「この女……一発殴りたい……」

もう、ミラさんはちょっと簡便してください。本当に。

……おい、その中年女二人組み、こっち指差して噂話してるんじゃない。消え失せろ。

「ふーむう、着るのは分かったが、待ってるのが暇だ。暇すぎて死んでしまう……何かないか? PSPとか」

「無いし買わんど。……ほら、1000円やるから菓子コーナーでも見てるかなんか食ってろ」

「私は三歳児か!」

「三歳児に1000円は渡さないとと思うぞ!？」

どんだけリッチだよ、その三歳児。

三歳ぐらいなら1000円とか何でも買えるレベルじゃないか。

冗談は顔だけにしろ。

「冗談だ、ほら、さっさと行け。私が空腹で死ぬ前に」

……お前が昨日食った量を思えば一週間ぐらい何も食わなくても生きてけるんじゃないか?

とか何とか思いつつ、俺はエレベーターへと向かう。……俺の財産をミラの胃袋に投げ捨てるために……。

06 一買い物／続（後書き）

次回こそ……出るはず。変態企業社長。

07 一串刺す(前書き)

タイトルどおりです。まったく。

07 一串刺す

「なるほど、我ながらに似合うな……」

私は鏡に映った自分の姿を見て思わず眩く。

いやしかし……自惚れでもなんでもなく、本当によく似合っている。

ハイエナパーカーでこの似合い度だ、貪食パーカーなど着たらどれだけ似合うだろうか。

家に帰るのが実に楽しみだ。

等と思いつつ、ミラ・ファーゴサイトこと私は試着室の外へ出る。

……ミラ・ファーゴサイト。

サクサキ ナオキ……私の契約者（というか便利君）が私に与えた名前だ。

フルで言うところ『ミラ・カウリオドウス・ファーゴサイト』。

ミラはギリシャ語で『運命』、カウリオドウスはギリシャ語で『牙』、ファーゴサイトは貪食細胞……または『細胞を食すもの』を示している。

なんとも厨二病くさい名前だ。嫌いじゃあないが……。

……などと思いつつも先程見つけたファミリーストラン……の近くにある肉を棒状にして焼いている小店へと向かう。

……あれはいい物だ。絶対そうだ。私の感がそう告げている。

ファミリーストラン？ 知らんなあ……そんなものは……。

はやる気持ちを抑えながらも、早歩きで小店へと向かう。

ああ……いい匂いだあ……匂いなんて一切しないが、焼かれた肉の棒を見るだけで濃厚な香りが感じられる。

クソッ、卑怯な。あんなの見たら買わずにはいられない！ 体が吸い寄せられていく！

とか思いつつカウンターへと到着。

「へい、らっしゃい！ 嬢ちゃん、何が欲しいんだい？」

そして見事なスキンヘッドの男がカウンターの奥から優しい笑顔を向けつつ私へと聞いてくる。

何が欲しいって。

そんなの決まってるじゃないか。

「貴公の肉棒が欲しい」

「……………は？」

ん？ スキンヘッドの男が固まったぞ？

……………何かおかしなことを言っただろうか？

いや、言っていない。だってこの男が焼いていて、それでいて棒状の肉なのだから『貴公の肉棒が欲しい』で注文は合ってるハズだ。

「……………いやあ、それは流石に無理だなあ……………、いくら嬢ちゃんが可愛くても俺にはこえーおっかあが居るし、あと犯罪になっちまうからな」

「何……………！？ 犯罪だと……………貴公、まさかその肉棒は人肉なのか……………？」

「いや、普通人肉じゃねえか？」

……………なるほど、どうやら此方の世界では同族の棒を棒状にして焼いて売るのが……………。

なかなかクレイジーだな。

というか、何で犯罪になるのに売ってるんだ？ 意味が分からん。麻薬のようなものなのか？

「いや、しかしだが……どうしても私は欲しいんだ。貴公の肉棒が」
「えええー……？ んじゃあ……いや、でもなあ……」

「安心しろ！ 好物だ！ 残さずに頂くから！」

「そ、そこまで言うなら……」

よし、ようやく折れた！

やったぞ、ナオキ。私は自分の手で食物を手にすることができたぞ！

私は満足感に体を浸しながらカウンターへと千円札を置く。

「これで買えるだけくれ」

「おう？ ……あ、ああー……、肉棒ってフランクフルトのことか、ああ、なるほど……。そうか……。『俺の』焼いた『棒』状の『肉』で……。『貴公の肉棒』か。ああ、なるほどなるほど……」

……うん？ 何を今更なコト言ってるんだ、この男は。

いやしかし……。これで私も罪人か。……この世界に暗月の剣がない事を祈ろう。以前の姿ならまだしも……。今の姿じゃ簡単に殺されかねん。

「これで買えるだけ……。つつうと四本だぞ？ 食えるのか？」

「四本だと……。？ くうっ……。倍は欲しいが……。仕方ない、それで我慢しよう」

「倍！？」

男は一瞬目を丸くして此方を見たが、すぐに肉棒を袋へとつめる作業へと移る。

お、おお……。はやく喰わせろ……。貪らせてくれ……。その肉棒を……。むしゃぶりつきたいんだ……。

「しかし、嬢ちゃんもフランクフルト知らないって……変わってんなあ……」

肉棒——ふらんくふると——を袋へと詰めつつ男が何か、若干珍しいモノを見るような目で此方を見つつ、そんなことを言ってきた。

……これはまずい。変わった奴だと思われている……確実に。

そして変わり者だと思われるのは不味い……そんなものはナオキを見てればイタいほど分かる。

……この間アイツの携帯を見たら電話帳に『家』と『妹』と『父』と『母』と『上司1』から『上司12』の十六個しか登録されてなかった。なんとも寂しいヤツだ。

まあ、そんなナオキのコミュ障なんで別にどうでもいい、それよりも……どうにかして……何とか誤魔化せないか？

そこまで考えて、不意に脳裏に私へと話しかけるナオキの姿が映る。

『誰かに疑われたりしたらこう言え、《私は————じよで——が最近——喪失————て頭が混乱していて……》とな。……また、あるいは俺のように自分の邪気眼を解放し、お前の秘めたる力である《人避け》ヒューマン・アウトドアや《混沌雑語》ワードシナイカー……そして《八式激龍吐息》ドラゴンブレスを駆使しろ』

ぐっ……無駄な部分だけよく覚えていて重要なところが抜けている！

後半のイタイタしい厨二病は一字一句抜けずに全部覚えてるのに！これは……、なんとかアドリブで切り抜けるしかないのか……。

「そ、それは。その……」

「ん？ どうしたよ？」

「わ、私は。さ、最近……しよ……、……しよお……しよじよそうしつ……」 させられて……頭が、混乱してるんだ」

「な、何ィ!? む、無理矢理やられたのか……?」

いい感じに男が此方へと悲しむような視線を向けてきた。

……よし、これはイケている! さすが私、天才だな! まったくもう、自分を抱きしめたいよ!

「ああ……。最近無理矢理しよじよそうしつさせられてな、混乱してるんだ」

「ひでえコトしやがる奴も居るもんだ……無理矢理処女喪失させるだなんて……辛かったろ?」

「死んだかと思った」

「ぐうっ……可愛そうに……!!」

男は悔しそうな表情をして拳を握り締めている。

おお、効果は抜群だ! ちょっとだけ見直したぞナオキ! 今度風呂に入ったとき背中を洗ってやろう! ……いや、やっぱ面倒だからいいか……自分で洗わせよう。現実はそんなに甘くない。

「よし、サービスだ……八本くれてやる!」

「何!? 本当か!?」

「ああ、もってけ泥棒!」

YES!! ありがとうナオキ! ありがとうスキンヘッドの男!
! そして『しよじよそうしつ』!

……それにしても、しよじよそうしつってどういう意味だ? そうしつは……喪失だろうから、無くすだとかそういう意味だとは分かるが……。

しよじよって何だ。しよじよ……あ、処女か。

ううん、処女お……？ 処刑するに女だから……女の処刑人……か？

それを喪失って……ますます意味がわからん。日本語は奥が深いな……。

とか思っつて男からふらんくふると……いや、これは外来語か。フランクフルト……なるほど。

……まあ、フランクフルトを受け取ろうとした瞬間。

「お前はまたそうやって無駄なことを繰り返すのか……？」

男の背後からすうつと女が顔を出した。

その女は非常に長い赤髪に水色の眼……というなんとも染色&カラコンチックな見た目をしていた。

……いや、絶対染色とカラコンだろコイツ……私も言えないが……。

「げえっ、呂布！」

「私が呂布程度で済むと思うなよ……？ 修正が必要だ……」

わけの分からない会話を交わした直後、赤髪の女にスキヘッドの男が店の奥へと引っ張られていく。……フランクフルトごと。

……ああ、私のフランクフルト……。

『わ、悪かった！ 悪かったから許してくれ！ 頼む！ どうかこのとおり！ お願いします！』

『ダメだ……お前の出した損害は大きすぎる……修正が必要だ……』『マキタエンジンチェーンソー！？ おめえ、そんなの使って何すっ——』があああああああ……！』

男と赤髪の女が姿を店の奥に消してから数秒。

ギヤリギヤリギヤリツツ!!　　という何かを削るような音と何か水が吹き出るような音、そしてけたたましいモーターの音が私の耳に飛び込んでくる。

奥で何をやってるんだ？

というより、これが夫婦という奴か……楽しそうだな。羨ましいよ。^{ふらや}

とか思ってたらビジャツという音と共に真っ赤に染まったフルーツが八本入った袋がカウンターへと投げ捨てられる。

ああ、奥でケチャップを作ってたのか。

……うーん、それにしてもケチャップの量が多すぎないか……？
まあいいか、味は濃いほうがいい。

そう思って店から離れつつも、一本袋から取り出し、口の中に突っ込む。

……うん？　何か血っぽい味がする。

まさかあれか、ケチャップって赤いから『もしかしたら血の味のケチャップが存在するのかもしれない……』と思ってたが、実在するとは。

……っていうか、肉は普通の肉じゃないか。人肉じゃない、この味は人肉じゃない。詐欺か。あの店詐欺か!?

あとで訴えよう。

しかし、味自体はともいのでやっぱ許そう。

とか思いつつ、二本目のフルーツに手を出そうとしたところで――。

「な、なんだ貴様等は！　やめろオ!」

――何か見つけた。

何か、というか特異な光景というか。

白衣を着た男が三人ほどの……女？　に囲まれていた。

ああ、あれが逆レイプってヤツか。はじめて見た。

「お前が『シヨツクウェーブジェネレーター超振動波発生装置』を完成させたことは既に知っている、ご同行願おうか」

「こ、断るッ……俺は誰の指図も受けずに生きて行くのでなあ……」

若干ズレているスーツの襟を直しながら見下すような表情をする男。

……あー、なんかナオキに似てる。あの男も厨二病か。

……………。

流行ってるのか？

「ふん、いいか。我等が必要としているのは貴様の脳のみだ。……四肢を切断する、という手段も取れるのだがな」

「な、なににッ！？ き、貴様……その残虐性……非道さ……『エンゲツ十紅（クレナイ）——ヤシロ炎月社』だな！？」

「……貴様に名乗る名前などない。……今のうちに静かに付いてこれば、お前が五体満足を維持し続けられることを約束しよう」

……しかし……、逆レイプとは恐ろしいものだ。四肢切断するらしい。

もはや強姦の粹に収まってない……。

とか思いつつ、八本目のファンクフルトを取り出して、租借し始めると——。

「……あ？」

男を取り囲む三人の女のうち、ふわりとしたロングヘアが特徴的な女が此方を見てきた。

お？ 何？ 何でこっち見てるんだ？ 気にしないで続けてくれ。逆レイプがどんなものか興味がワリとある。

とか何とか思ってたたらロングヘアの女はぎり、と鈍く光るモノを懷から取り出した――。

――ナイフ？

そう思った瞬間にはロングヘアの女は弾丸のように加速し、私へと突っ込んでくる。

「危なッ……」

体を大きく右に動かして女の突撃を避ける。

――殺す気だったよな、今。

――この私を？

――そんなナイフ一本程度で？

――実に面白い！

「お、おい、君ィ……逃げろ！！ こいつらはイかれてる！！」

白衣の男も私の存在に気づいたらしく、荒々しい叫び声をあげている。

「逃げる？ 冗談じゃないな。私の腐敗した不敗伝説をここで終わらせる気は毛頭ない！」

……決まった！

などと思っている暇もなく、再び女が突撃してくる。

難なく左に避けるが、今度は突撃だけじゃなく、避けた私の体を狙ってナイフの起動を変えてきた……軽量の武器だからこそ可能な変則的な動き……コイツ、素人じゃあないな。

……いや、人間の体術なんか知らんが。

私は更に体を下に屈め、ナイフの起動を避けると、そのまま女の腹部へと先程食い終わった八本目のフランクフルトの串を突き刺そ

うと勢いよく振る。

「なっ……!？」

女は身を引こうとする――。

が、それが狙いよ。

屈んだ状態で、体を引こうとする女の膝を抱くように引き寄せ、おまけとばかりに肩で上半身を押し出し、横倒しにする。

「私に齒向かったのが間違いだったな、能無しの小人」

横倒しになった女の腹部には私が先程からずっと右手で持っている串が当たっている。

女はすばやく体制を立て直そうとするが、逃がさない。

立て直す前にフランクフルトの串を勢いよく踏みつける。

「がッ……!？」

強い抵抗はあったが、何とかフランクフルトの串という名の釘は女の腹部へと深く突き刺さる。

これこそ、まさに串刺し。

「き、貴様ッ！」

先程まで白衣の男を抑えていた女二人も此方を睨んでいる。

どうにも腹部に突き刺したことで私を見る目が変わったらしい。

「来るか？ こっちの弾はまだ後七本あるぞ？」

「ナめた真似をッ……!!」

ナめているのはそちらだろう、なんと心の中で思いつつも敵を観察する。

女二人は今地面に横倒れになっている女と同じように短く、しかし人を殺すには十分な獲物——ナイフを取り出す。

二人同時か……、行けるかね。

——などと思った矢先。

「バアンツ！」という派手な音と共に私から見て右手の方向に存在する木製の壁が突き破られ、中から一つの影が姿を現す。

⋮

先程小店で見た赤髪の女だった。

手には細かく振動するチェーンソーを持ち、身に着けたエプロンや衣服、そして顔。チェーンソーにはべつとりと赤黒い何かがかこびり付いている。

…なんだあれ。

「何だ貴様はっ……!？」

赤髪の女を挟んで向こう側に位置する女が赤髪の女へと典型的な質問をする。

さて、通りすがりの……。

「It's my storeeeeeeeeeee」

店長だった。

……店長だったのか……。私はてっきりバイトか何かかと思ったのだが……。

そして店から出てるぞ、もうそこお前の店じゃないぞ。

「私の店での盗難……暴力行為は……絶対に許さアアアアアアアアアアアッ！……！」

その持つてるチェーンソーが既に暴力だ！
なんて心に思いつつも口にはしない。口にしたら生きたまま三枚卸にしてきそうな勢いだ。

「何だコイツは……完全にイかれてやがる……てめーもそう思うだろ？ 思うなら足を退かせ」

「あ、うん」

思わず刺した女に乗せていた足を退ける。

……。

って、しまった！？ 罠か！！

クソッ、卑怯な奴め！！

「はん、馬鹿がッ！ 能無しの小人はてめーの方だったな！」

直後、女は私を突き飛ばし、腹部を抑えながら私との距離を取る。
くそお……やられた……ッ、アイツは相当の手馴れだな……。

「……これで三対三か……」

私は手を組んで悩みぬく。

相手は暗殺部隊……っぽいのが三人。

此方は私と厨二病っぽい男とサイコパスが一人……。なるほど、私に分があるな。

「……行けるな、貴公、貴女？」

「すまないが俺は数に入れないでくれ」

「It's my storreeeeeeeeee
eeeeee!!!」

声を掛ければ各々の返事が返ってくる。……これは勝てるな。

特にサイコパスの赤髪女には期待できる。先程から地面にチェー
ンソーの刃を擦り付けて威嚇を繰り返したりしているしな。

「ふざけた奴らだ……、おい、さっさと片付けて目標を回収するぞ」
「いや……待て………、ここは、引くぞ……これ以上騒ぎになれ
ば不味い……」

何……？ 身を引くだと……？

つまりそれは私の事実的勝利。

ああ、なら放って置いてもいいか。

「……てめー、随分とナめてくれたじゃねえかよ？」

他の二人に肩を担がながらもロングヘアの女は此方を一瞥し、
言葉を発してくる。

……だから、ナめてたのはお前らの方だと。

「……ナめるも何もありはしない。私はただ生きる為にもがいてい
るだけだ。さっきのコトだって貴様がナイフを出さねば手出しも口
出しも口外もしなかったぞ？」

「信じらんねえな……。まあいい、……てめえ、覚えて置けよ？
五倍以上の利子付けて後悔させてやつから」

ロングヘアの女は蜘蛛を連想させる非常にネチっこい笑みを浮
かべつつ、他の二人に肩を支えられて去っていく。

……いや、結局あれはなんだったんだ？
全てが謎のままだぞ、これ。

「……ふう、助かったよ。ここは素直に礼を言っておこうか……？」

と、思ったが、その謎を解氷させることができる人物が今、私の目の前にいた。

これは是非じっくりと話を聞きたい。

……そういえば、場の雰囲気であの女に串を突き刺してしまったが、あの女は無事だろうか。

まあ、死んだら運が悪かったってことだな。

そして礼なんか言わなくていいからメシをおごってくれんかなあ……。

……いや、まで。私はコイツの命を助けたんだ……つまり……。

「いや、礼など必要ない……ただ、奢ってくれないか？ 昼飯を――」

「ん？ ああ、かまわんど。そのくらい……じゃあ、そのファミレスで構わないな？」

「ああ、構わない」

目の前にいるよく知らない男は今、恐らく。

『少女一人の昼飯を奢る程度で命が助かったんだから安いモノだ……』

などと考えているのだろう。

よし、そんなに現実が甘くないってことを教え込んでやろう。そうしよう。

「私の店での盗難・暴力行為はアアアアアアアアアア！」

……コイツはもう、放っておこう。虚空に向かって話しかけてるし。

致命的だ、イロイロと。

「……とりあえず、行こうか」

「あ、ああ……」

男に連れられながらファミレスへと向かう。

……無論その後、厳つい男二人に両腕を抑えられた赤髪の女の姿を見たのは言うまでもない。

なんだったんだ、アレは……。

07 一串刺す（後書き）

分かりにくすぎる複線——いったい何人が拾えるのでしょうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4709y/>

貪食IS-Gaping IS-

2011年11月24日18時57分発行